

2010年度 修士論文

スポーツ紙におけるスポーツ表象の変化
～一面の内容分析から～

The Changing Representation of Sports
in Sports Newspapers
～A Content Analysis of the Front Page～

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 スポーツメディア研究領域

5009A093-3

渡辺 佑希

Watanabe, Yuki

研究指導教員： リー・トンプソン 教授

目次

第1章 研究背景	1
第2章 分析方法	
2-1 対象紙	7
2-2 分析方法	8
第3章 分析結果	
3-1 1951年	13
3-1-1 大見出し	17
3-1-2 大見出し以外の見出し	20
3-2 1960年	21
3-2-1 日刊スポーツ	22
3-2-1-1 大見出し	22
3-2-1-2 大見出し以外の見出し	25
3-2-2 東京スポーツ	27
3-2-2-1 大見出し	29
3-2-2-2 大見出し以外の見出し	32
3-3 1970年	33
3-3-1 日刊スポーツ	34
3-3-1-1 大見出し	34
3-3-1-2 大見出し以外の見出し	38
3-3-2 東京スポーツ	39
3-3-2-1 大見出し	40
3-3-2-2 大見出し以外の見出し	43
3-4 1980年	44
3-4-1 日刊スポーツ	45
3-4-1-1 大見出し	45
3-4-1-2 大見出し以外の見出し	48
3-4-2 東京スポーツ	52
3-4-2-1 大見出し	52
3-4-2-2 大見出し以外の見出し	56

3-5	1990年	58
3-5-1	日刊スポーツ	59
3-5-1-1	大見出し	59
3-5-1-2	大見出し以外の見出し	62
3-5-2	東京スポーツ	64
3-5-2-1	大見出し	65
3-5-2-2	大見出し以外の見出し	68
3-6	2000年	70
3-6-1	日刊スポーツ	70
3-6-1-1	大見出し	71
3-6-1-2	大見出し以外の見出し	73
3-6-2	東京スポーツ	75
3-6-2-1	大見出し	75
3-6-2-2	大見出し以外の見出し	79
3-7	2010年	81
3-7-1	日刊スポーツ	81
3-7-1-1	大見出し	81
3-7-1-2	大見出し以外の見出し	85
3-7-2	東京スポーツ	86
3-7-2-1	大見出し	87
3-7-2-2	大見出し以外の見出し	89
第4章	まとめ	92
4-1	見出しの総数	92
4-2	見出し別スポーツ種比較	93
4-3	スポーツ種別総数割合	95
4-4	女性に関する見出し	96
4-5	おわりに	98
引用・参考文献		100

第1章 研究背景

スポーツ新聞は戦後のスポーツ文化を支えてきた物の一つである。1946年に「さあ明るく朗らかにスポーツだ」と謳って日刊スポーツが発刊されて以来現在まで、朝刊紙も夕刊紙も日本人には欠かせないものとして存在している。そのようなスポーツ新聞が現在に至るまで、どのスポーツをどのように論じてきたのかを解明するのが本論文のテーマである。

本題に入る前に、スポーツ新聞の歴史について簡単に説明したいと思う。海外で純粋なスポーツ新聞が最初に刊行されたのは、『ベルズ・ライフ・ロンドン』の1822年である。ここでは競馬が中心に報じられ、主に日々賭け事を嗜んでいたジェントルマンを対象としたメディアのものであった。他方で、アメリカでは『ナショナル・ポリス・ガゼット』（1845年創刊）が野球やボクシングのような労働者が好んだスポーツを積極的に取り上げ、成功を収めた。その他、ヨーロッパ諸国の植民地でもスポーツ新聞は刊行され、海外の入植者たちが母国のスポーツ界で何が起きているのかを定期的を知る手段として使用されていた〔中房、2010：123-125〕。

一方で、日本におけるスポーツ新聞は、現在は全国で発刊されている朝刊紙は日刊スポーツ、スポーツニッポン、スポーツ報知の三紙である。そして一般的な地方紙よりも大きい、全国紙のように日本中を網羅していない、いわゆるブロック紙は中日スポーツ、サンケイスポーツ、道新スポーツ、西日本スポーツ、デイリースポーツ、九州スポーツの六紙である。また夕刊紙は夕刊フジ、日刊ゲンダイ、東京スポーツの三紙が現在は発行されている。

そんな日本のスポーツ新聞の歴史を見てみると、田所は「1946年に日刊スポーツが欧米諸国から遅れること約120年経ったのちに誕生した。一般紙すらもタブロイド版発行を余儀なくされた新聞用紙の極端な不足の時代、言い換えれ

ば一般紙がスポーツ報道にさく紙面がほとんどなかった時代に、スポーツ紙が発足したことが、その成功を約束した。それと同時に占領軍が定めた三S政策（Sport、Screen、Sex）のうち、2つのS、スポーツとスクリーンのためのメディアが必要とされた客観情勢にも支えられた」[田所、1964：47]と述べた。

そのような誕生から現在に至るまでの経緯について、三浦は「1946年に日刊スポーツが発刊されたのを皮切り次々と誕生したスポーツ新聞は、昭和40年代のV9に象徴されるプロ野球隆盛の波に乗りながらスポーツ専門誌としての基盤を確立した。さらに発行部数の増加した1980年代には『社会面』、『芸能面』が誕生し、従来の『スポーツ専門誌』から『総合娯楽紙』へと変身を遂げていった」[三浦、2008：5]と述べている。

また、木村は「スポーツ新聞の終局の目標は、社会生活における精神的なゆとり、保険生活の向上、愉しみある生活ダイヤという意味からのスポーツ実践を振興することである」[木村、1950：25]と述べた。

次に、スポーツ新聞は、この世に存在しているメディアの中でどのような扱いをされているのか。芹沢は「スポーツ新聞は、どのような意味も生産しない。反対に、純粹に消費するだけといっても極論では決してないような記事が満載されている」[芹沢、1992：43]と指摘している。

またスポーツ新聞は、その他のメディア・スポーツとの関係からみても、その特異性が突出しているといえる。ビレル&ロイはメディア・スポーツの機能を「情報」「統合」「覚醒」「逃避」の四つに分類している。「情報」とは、協議の統計的知識を増大する機能、「統合」とは、読者／視聴者同士の間に関和的経験を提供する機能、「覚醒」とは、快楽的、審美的、刺激的経験を提供する機能、「逃避」とは、鬱積した感情や個人的問題から解放する機能を指す。この四つの機能は、メディア・スポーツの時間的次元に対応させることができる[ビレ

ル他、1979 : 456]。

メディア・スポーツを消費するという経験は、スポーツをその場で観戦するという「即時的」なものから、テレビ・ラジオのように距離を置きながらも同時刻に見る事が出来るという「同時的」なものを経て、新聞のように時間が経ってから（翌日など）結果を知るという「遅延的」な経験まで時間軸に沿って区別することができる。このうち、経験が「即時的」であるほど「統合・覚醒」の機能が高くなるが、新聞のように「遅延的」になるほど「統合・覚醒」機能が弱まり、「情報」機能が高まるとしている [ビレル他、1979 : 457]。

ひるがえって、スポーツ新聞を読むという行為は「遅延的」であるにもかかわらず、「情報」機能は低い。試合結果を知りたければネットやテレビのほうがはるかに速いわけで、統計的情報に関しては、スポーツ新聞の価値は競馬欄を除外するとないに等しい。また「統合」機能においても、例えば球場などで直接チームや選手を応援する際に、スポーツ新聞に載っている情報を共有する事で読者同士が親しみを持つ事ができる。すなわちスポーツ新聞においては、読者は高い「統合」機能を持っていると考えられる。

このように、スポーツ新聞は、「統合」機能が高く「情報」機能は低い。つまり、前述した「新聞のような一般的に「遅延的」といわれるものは、「統合」機能が弱いのに「情報」機能は高い」というビレルの考えとは真逆の機能を所持しているのである。そして、スタジアムで観戦するという「即時的」なもの、テレビやインターネットを通しての観戦という「同時的」なものとは性質は異なっており、スポーツ新聞には「〇〇的」と当てはまる言葉が見つからないのだ。故にその他のスポーツ・メディアと同列に扱えない特異なメディアであるといえよう。

上記した歴史と、メディアでの扱われ方を留意した上で、本研究では、日刊

スポーツ（朝刊紙）と東京スポーツ（夕刊紙）を対象として、その中で表象されているスポーツの変遷を辿っていくこととする。この2つのスポーツ新聞を対象とする理由の詳細については後述するが、数あるスポーツ・メディアの中でも、スポーツ新聞が日本のスポーツの概観の変遷を辿るのに最適だと考えられるからである。

したがって特異なメディアといわれているスポーツ新聞が、戦後間もなくから現在に至るまでどのようなスポーツを表象しているのかを浮き彫りにする事を本論文の目的とする。

次に先行研究についてであるが、スポーツとメディアとのかかわりについての研究は、スポーツ社会学の側面から数多く研究されている。多くの場合は、女性選手についての言説分析、またはスポーツ新聞の今後を憂うものであった。しかし、メディア・スポーツの中でも特異なものとされているスポーツ新聞に関する論文は、世にはほとんど発表されておらず、また日本のスポーツ新聞がどのようなスポーツを表象してきたのかをテーマとした論文はほぼ無いに等しいといえる。また、本研究のように1つのスポーツ・メディアに着目し、その中で扱われているスポーツそのものの変遷を辿ったものも見当たらなかった。そのような状況の中で、下記にあげる2つの研究を本研究の参考としていきたいと思う。

近藤は、1957年9月から1958年8月に発行された西日本新聞のスポーツ記事、1958年5月から1959年4月までに合わせて102冊発刊された週刊朝日とサンデー毎日のスポーツ関係の記事の内容分析と読者の反応分析を調査し、その結果について考察している。本研究は、内容分析のみを対象とし、読者の反応分析について説明する事はここでは関係ないので省略する。記事分析の調査方法として、スポーツの種目別に記事量を測定した。その結果、スポーツ記事

には約 50 種目にのぼるスポーツが取り上げられていた。しかし記事の大半はプロ野球についてのものであり、それに次ぐのが大相撲であった。野球と大相撲によって 4 分の 3 以上のスペースを占められるために、数の上では 50 種目位のスポーツが扱われていても、そのほとんどがわずかのスペースが割り当てられているに過ぎず、スポーツ新聞が野球新聞と呼ばれるゆえんであった [近藤、1960 : 139]

次に熊安は、日本および諸外国の「メディア・スポーツ」報道におけるジェンダー・バイアスの検討をふまえながら、「スポーツ」を人々のより広範な活動としてとらえて新聞記事の分析を行った。この際の検討課題のひとつとして、(トップレベルの) 競技スポーツに限らないより幅広いスポーツ活動、つまり地域のスポーツイベントや、競技結果の報告以外の広範なスポーツ情報 (スポーツのあり方に関する論説や人事の話題、スポーツ関連のさまざまなトピック、スポーツにかかわる事故・事件など) について報道された新聞記事を収集し、その内容を見出しから性別に分類して、1990 年代におけるその男女比の変化を検討することであった。そして、女性の情報を伝える記事見出しの女性表現について、ジェンダーの視点から検討することを目的とした。その結果、「女性をメインに扱った記事の割合は男性に比して圧倒的に低いまま変化が見られない反面、男性にかかわる記事の割合が増加していることが明らかになった。一方で、スポーツ関連記事見出しの女性表記の方法について検討したところ、かつてよく目にしたような女性個人を「名のみ」で呼ぶ表現や「女〇〇」と男性の亜流扱いする表現は減少しつつあるものの、女性のスポーツ活動を総じて男性の亜流としての「女性スポーツ」分類にカテゴライズする方法は定着しているように思われる」 [熊安、2000 : 161] と論じた。

以前私が授業内で行った調査 (2009 年度の日刊スポーツの見出しを調査) で

は、プロ野球の記事が多く、女性に関する記事はわずかにとどまっていた事を知る事ができた。

以上の各研究においては、本研究の課題と年代、取り扱ったメディア、細かい見出し種の違いこそあるが、具体的な方法、また目的は類似しているところが多々あった。その点において、本論文に重要な示唆を与えたといえる。

第2章. 分析方法

2-1. 対象紙

本研究では、朝刊紙と夕刊紙、2つのスポーツ新聞を扱う。その中で朝刊紙は日刊スポーツを、夕刊紙では東京スポーツを用いて調査する。これら2紙を選んだ理由は2つある。

まず日刊スポーツは、1946年3月6日に創刊された、現存する日本最古のスポーツ新聞である。戦後の暗い世の中に「明るく楽しいスポーツを」という精神のもと、スポーツの熱い感動を読者の目線で伝えるとともに、激動する社会の動きをいち早く届けてきた。また現在においても、豊富な情報、正確なデータ、公平中立な報道姿勢、見やすいレイアウトなど、スポーツ紙のパイオニアとして常に他紙を牽引する役目を担っている。また発行部数は、2002年のピーク時と比べれば減少はしているものの176万部（2009年）とスポーツ新聞の中でも第1位の発行部数を誇っている [三浦、2000：4]

東京スポーツは、読者が興味を持つ、話題になると思われるニュースを本紙独自のユニークな視点と切り口で徹底的に追求し“B級の面白さ”を伝えることを信条として1960年に創刊された。発行部数は現在約242万部と、夕刊紙だけでなく全スポーツ新聞の中でも第1位を誇っている。

このように、共にスポーツ新聞の朝刊、夕刊の中で発行部数1位を記録しており、多くの読者に慣れ親しまれている事がこれら2紙を選んだ1つ目の理由である。

2つ目の理由は朝刊紙と夕刊紙の違いが理由である。この2紙は、一般的に大きく異なるといわれている。その差は、一般紙の朝刊と夕刊の差よりもはるかに大きいという。なぜなら、読者対象がまず違い、扱う記事も角度も異なっているという事ができる。また、夕刊紙は、ある意味で朝刊紙よりも個性的であ

る。つまり、ほとんど毎日といってよいほどプロレスを看板に掲げるものと、プロ野球を全面に押し出すものがほぼ半々で、プロレスを一面に載せているものも、記事量からいえばプロ野球とプロレスはほぼ同じであるといえる。また、田所は夕刊紙について「プロ野球の記録は朝刊紙におさめられるので、内幕、ゴシップとみられるものが多くなり、プライバシーの問題もときにならない。また即売がほとんどである関係からか、読み物が柔らかすぎる」と言っていた [田所、1964 : 47]。

このような違いがあるといわれている朝刊紙と夕刊紙であるが、読者対象や発行時間が異なる事で、記事の内容まで異なっているのか。ただでさえ特異なスポーツ・メディアといわれているスポーツ新聞において、扱うスポーツに関しても大きな違いを見ることができるのか。特に、日刊スポーツと東京スポーツは、朝刊紙と夕刊紙と分類しても真逆の位置にある新聞だといわれている。その点から比較しつつ分析をしてみたいと思った事が 2 つ目の理由であった。

2-2. 分析方法

対象とした新聞は日刊スポーツと東京スポーツの 2 紙で、調べた年は各々 1951 年 (日刊スポーツのみ)、1960 年、1970 年、1980 年、1990 年、2000 年、2010 年とした。

作業方法は、国立国会図書館に所蔵されていたバックナンバーを用いて、全て私が手作業で集計を行った。日刊スポーツを創刊の 1946 年から分析しなかったのは、国立国会図書館に現存されている分がほとんどなかったからである。

以下に具体的な作業方法を述べる。

まず 2 紙ともに各年の新聞記事の一面を、大見出し・中見出し・小見出し・写真・図表の 5 つに分類した。各見出しの具体的な大きさは、大見出しを 300pt

以上、中見出しを 150pt 以上 300pt 未満、小見出しを 150pt 未満とした（写真 1）。しかし、1990 年以前の新聞に関しては、現在の見出しのように大きな見出しがなかった（写真 2）。なので、1990 年以前は大見出しを 3cm 以上、中見出しを 1cm 以上 3cm 未満、小見出しを 1cm 未満とした。

新聞の一面に着目したのは、読者の注目度が一番高く、新聞の「顔」とも言われているからである。また、見出しを大・中・小と分けたのは、前泊が「新聞紙面は『トップ（頭）』『ハラ（腹）』『カタ（肩）』『ベタ（一段記事）』などと呼ばれる見出しの大きさが 5 段、4 段、3 段、2 段、1 段と異なる大中小の記事で構成されています。重要度を表現でも相対評価。異なる大中小の記事で構成されています」[前泊、2009：57] と述べているように、大・中・小で記事内容の重要度を示しており、比較するのが易いと考えたからである。

特に今回は大見出しにこだわって、本研究は進めていきたいと思う。大見出しは「顔」といわれる一面記事の中でも一番目につき、誰もがそれを見て一瞬に新聞記事の中身が分かるように設定されているからである。いわば、読者は大見出しを見て新聞を買っているといっても過言ではない。なので、大見出しを中心に本研究を進めることとする。

最後に分類の定義について述べたい。本研究では独自の分類を行った。下記の表 1 に今回分類したスポーツ種をあげた。芸能、社会問題、皇室・王室といったものもあるが、今回は「スポーツ種」として便宜上用いることとする。

また野球、サッカー、陸上、水泳ではさらに細かなカテゴリーに分類をした（表 2～5）。

写真 1. 2010 年度の日刊スポーツ (2010.5.31)



写真 2. 1960 年の日刊スポーツ (1960.8.3)



表 1. 分類したスポーツ種

野球	ラグビー	走り高跳び	フィギュアスケート	ヨット
ソフトボール	水泳	走り幅跳び	氷上ダンス	畜犬競技
サッカー	シンクロナイズドスイミング	ハンマー投げ	アイスホッケー	五輪
ボクシング	プロレス	やり投げ	ハンドボール	アジア大会
競馬	K-1	砲丸投げ	バレーボール	氷上大会
競輪	PRIDE	スキー	アメリカンフットボール	国民体育大会
競艇	総合格闘技	モーグル	登山	芸能
相撲	体操	スノーボード	F1	社会問題
レスリング	新体操	ノルディック複合	フェンシング	皇室・王室
ゴルフ	陸上	スキージャンプ	馬術	
テニス	駅伝	スピードスキー	卓球	
柔道	マラソン	カーリング	ボート	

表 2. 「野球」の分類

野球	プロ野球	巨人
		セ・リーグ
		パ・リーグ
		その他
	アマ野球	高校野球
		大学野球
		社会人野球
	海外野球	メジャーリーグ
		韓国野球
		台湾野球
		ハワイ・レッドソックス

表 3. 「サッカー」の分類

サッカー	高校サッカー
	Jリーグ
	日本サッカーリーグ
	日本代表
	海外

表 4. 「陸上」の分類

陸上	100M
	200M
	障害

表 5. 「水泳」の分類

水泳	自由形
	背泳ぎ
	バタフライ

プロ野球とサッカーのカテゴリーについて補足をする。移籍、異動を伴うものに関しては、該当する選手とチームの契約を境にカテゴリーを分けた。例として、斎藤佑樹投手は12月7日にパ・リーグに所属する北海道日本ハムと正式契約をしたので、7日以前は「大学野球」のカテゴリー、7日以後は「パ・リーグ」のカテゴリーに属す。西岡剛選手の場合、12月18日にミネソタ・ツインズというメジャーリーグのチームと正式契約を結んだので、12月17日までが前所属チームである千葉ロッテマリーンズが所属する「パ・リーグ」で、12月18日以降は「メジャーリーグ」とする。

サッカーの「海外」は、海外で行われている全サッカーをこのカテゴリーに分類した。例として、ロシアリーグのCSKAモスクワに所属する本田圭佑選手の場合、ロシアリーグでの試合に関しては「海外」のカテゴリー、日本代表として試合に出場した際の見出しに関しては「日本代表」のカテゴリーに分類した。また、W杯決勝戦やチャンピオンズリーグに関する見出しも「海外」に属す。

第3章. 分析結果

3-1. 1951年

新聞の分析を行う前に、1951年に起きた出来事を簡単に触れておきたい。まずスポーツであるが、3月にモーターボート競争法案が国会に提出され、6月に公布、即日施行された。これにより現在の競艇がスタートした。4月にはボストンマラソンで田中茂樹が日本人初優勝、7月にはプロ野球のオールスターゲームが初開催され、10月にはプロレスが初めて実施された（力道山 vs. ボビー・ブランズ）。また、大相撲は春・夏・秋の3場所制で春、夏は蔵前で、秋は大阪難波で開催された。

社会的な出来事としては、初めてNHKで紅白歌合戦が放送された。その他マッカーサーが朝鮮戦争での責任をとってGHQ最高司令官を解任され、3月には三原山が噴火するなどの出来事が発生した。

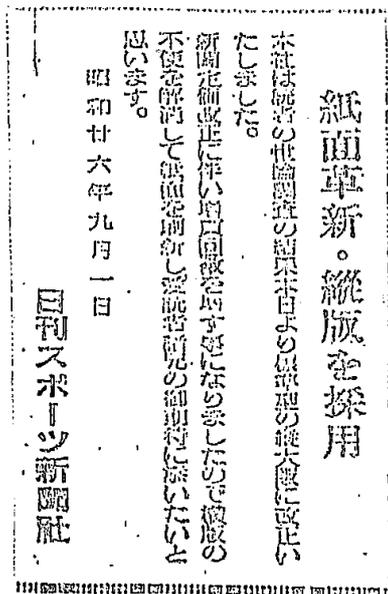
では1951年の日刊スポーツについて分析していきたい。この年は2枚刷りで売られており、365日毎日発行されていた。しかし、5/22、9/1と1年間で2度にわたり紙面のレイアウトが変わった。1回目の改正では見出しの数の増加を見る事ができたが、2度目の改正においては写真の大きさが変化した点以外、内容に関する大きな変化を見る事ができなかった（写真3、4、5）。尚、写真4から5への移行は、読者からの意見によって行われたという（写真6）。

それでは見出しの構成を見ていきたい。見出しの総数は8972個で、今回調べた中で最も見出しの数が多かった。大見出しは638個、中見出しは1713個、小見出しは6251個、写真は370枚であった。扱っていたスポーツ種は、大・中・小見出し・写真の順に25、25、39、14種類と多くのスポーツ種を記事にしていた。

写真 4. 1951 年の日刊スポーツ②(5/22)



写真 6. 紙面革新に関する記事 (9/1)



3-1-1. 大見出し

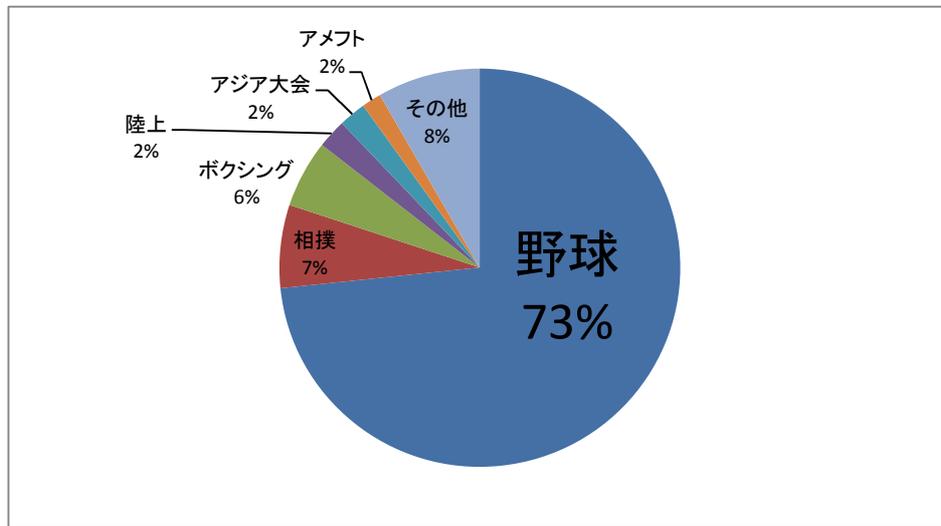
まず、大見出しについてだが、下の表 1 と図 1 を見てほしい。

表 6. 1951 年の大見出しにおけるスポーツ種と個数

個数	スポーツ種	個数	スポーツ種	個数	スポーツ種	個数	スポーツ種
468	野球	6	水泳	2	バスケットボール	1	スキー
43	相撲		サッカー		競馬		氷上大会
35	ボクシング	5	ラグビー		フィギュアスケート		自転車
15	陸上	4	駅伝		社会問題	/	
14	アジア大会	3	テニス		国体		
10	アメリカンフットボール		マラソン		レスリング		
7	五輪	/			アイスホッケー		
					スピードスケート		

このように、25 種類のスポーツ種で構成されていた。表 6 において赤い太字で示したものは、図 1 でその他以外の競技を表している。(以降同じ)

図 1. 大見出しのスポーツ種別割合



なおこの年の大見出しは、名詞単体ではなく全て 1 つの文のような形式になっており、一日に 2~3 個の大見出しが使われていた。

一番多く取り上げられていたのは野球であった。内訳は、プロ野球 321 個、アマ野球 96 個、メジャーリーグ 42 個、他 9 個であった。やはりプロ野球の多さが目立つ結果となった。そのプロ野球の内訳は、巨人 76 個、セ・リーグ 92 個、パ・リーグ 83 個、その他 70 個である。セ、パ両リーグが巨人よりも多く表象されていた。

この年のプロ野球は巨人の第二次黄金時代の幕開けといっても良い年であった。彗星のように現れたルーキーのサウスポー・松田清が、当時日本新記録となる破竹の 19 連勝。最終的に 23 勝 3 敗(勝率.885=リーグ 1 位)、防御率も 2.01 でリーグ 1 位と新人離れした活躍を見せ、チームを引っ張った。巨人では初の新人王を獲得している。

投手陣は別所毅彦が 21 勝、藤本英雄も 15 勝と安定した成績を残した。別所はベストナインにも選出されている。打っては川上哲治が.377 の高打率で首位打者、MVP を獲得。青田昇が本塁打(32)、打点(105)でリーグ 1 位となり、二

人で打撃タイトルを独占した。この結果、シーズン通して首位を独走し、途中15連勝の記録を挟み、最後は2位・名古屋に18ゲームの大差をつけて優勝、日本シリーズも南海ホークスに快勝し、日本一となった。

そんな巨人ではあるが、大見出しの数でみると少し寂しい結果となった。もちろん、プロ野球チームの中で最も多い数を誇ってはいるが、セ・パ両リーグの各合計に足りない数字であった。ここから、各チームを平等に報道して行く姿勢が少なからず見て取る事ができる。

プロ野球の中で「その他」が多いのは、シーズン開幕前に起きた、西日本パイレーツの球団譲渡問題、そしてそれに付随するコミッショナー制の確立について報道されていた事が大きい。2月、3月の大見出しで43個を数えた。

アマ野球の96個にも注目したい。特にこのうちの67個を数えたのが大学野球であった。この時代は、大学野球のシーズン（4月～6月）になると、プロ野球よりも大学野球が多く報道され、世間でも大学野球の方が注目を浴びていた。特に前年に天皇陛下の御覧試合が行われた早慶戦含む東京六大学野球に関しては、試合の開催される毎週末は大見出しで取り上げられていた。具体的には早稲田大学（「早大」、「早」）が19個、慶應大学（「慶大」、「慶」）が17個、明治大学（「明治」）が6個、法政大学（「法大」、「法政」）が5個、立教大学（「立教」）が2個で、東京大学に関しては0個であった。

また野球では、ハワイのレッドソックスが来日し、全日本軍や大学生等と対戦した記事が9個取り上げられていた（「レッドソックス来る」 8/16、「慶大、レ軍敗る」 8/19など）。

他競技では、アメリカンフットボールに関する見出しの多さにも注目したい。新年早々に行われるライスボールについての記事に終始した。この要因として、日刊スポーツが後援企業の一つである事が考えられる（「新春ライスバウルから

開く」 1/1、「東軍圧勝す本社後援ライスバウル」 1/3)。そしてメンバー発表の段階から大見出しで取り上げているので相当な力の入れようであったことが推測できる（「花岡総監督以下48名」 11/29）。

氷上大会や国体、アジア大会など大きな大会に関する見出しが多くみられるのも、この年の特徴である。アジア大会は、インド・ニューデリーで開催されたのだが、開会式に関するもの（「大会を平和の礎に」 3/4）や、大会結果を伝える記事（「日本二十四種目制覇」 3/12）などが見出しで扱われた。国体は10月に行われたのだが、その最終結果が報じられた（「天皇杯、東京に輝く」 11/1）。

3-1-2. 大見出し以外の見出し

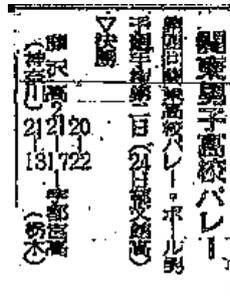
それでは中見出しについて見ていきたい。中見出しでは、大見出しと同じスポーツ種を扱っていた。

小見出しでは、中見出しから14種類増えた39種類のスポーツが報じられていた。その14種類はバレーボール（47個）、卓球、馬術（27個）、フェンシング（20個）、体操（11個）、ボート（10個）、ゴルフ（10個）、重量挙げ、ハンドボール（6個）、ヨット、柔道（5個）、登山（2個）、氷上ダンス、畜犬競技（1個）である。

しかし、ここでは結果だけを示し、解説が後に続くことがない見出し（ex.「関東男子バレー」 6/25 写真7）が半数以上を占めていた。例外だったのは畜犬競技で、競技を国家主導でやっていくことを決める法案が衆議院を通過したことを知らせる記事であった（「蓄犬競技法案衆議院通過」 5/22）。

また、障害者スポーツ（「小児マヒ学生の籠球」 5/15）や、教員バレー（「全日本教員バレー結果」 8/12）、様々な職種の野球大会（「全国造船対抗野球」 8/22、「25日から炭鉱野球」 8/23、「トンボ連覇か あす“有名商社親善野球”」 11/16）

写真 7. 結果だけを示す見出し (1951.6.25)



といったスポーツも見る事ができた。

最後に、女性記事に関して述べたいと思う。大見出しで取り上げられたのは、1回であった。その一回は陸上の吉川綾子と吉川節子である。第6回国民体育大会陸上の部、女子百メートルで新記録を出した事を報じている（「両吉川嬢日本新」10/31）。

中見出しでは4個見付き、1951年度に行われた全大会で日本新記録を更新した円盤投げの吉野トヨ子を取り上げられた（「吉野嬢円盤投に優勝」3/10）。この他は陸上女子100メートル女子（「女子陣断然強し」3/12）、東西対抗陸上競技大会における西軍女子代表（「女子は西軍僅かに有利」6/23、「男子は東軍、女子は西軍優勝」7/1）であった。

小見出しになると、徐々に女性選手は増えていき42個登場した。「ハート嬢」（テニス）、山内、杉村、「河本嬢」（陸上）、「野口嬢」、「カラマ嬢」（水泳）が登場した。また団体競技に目を通すと女子野球（29個）が目立った。他には女子走り高跳び、女子水泳 女子水上、女高バレー、高校バスケット、浦和一女高、女子ソフトボールといった種類のスポーツが名を連ねた。しかし、全て結果だけを示したもので、見出しの後に文が続く事は見る事が出来なかった。

3-2. 1960年

まずは1960年に起きた出来事を触れていきたい。スポーツでは、2度の五輪

が開催された。冬季五輪はアメリカのスコーパーレーで、夏季五輪はイタリアのローマでそれぞれ開催された。大相撲は年6場所開催されたが、5月には横綱・栃錦の引退というショッキングなニュースも飛び込んだ。そして、プロ野球はセ・リーグが大洋ホエールズ、パ・リーグは大毎オリオンズがそれぞれ優勝し、大洋が日本シリーズで勝利し日本一となった。

社会問題では、日米安全保障条約の調印（1月）から始まり、大島の噴火、岸信介首相の退陣、浅沼稻次郎の暗殺、そして日本初のカラーテレビ本放送がスタートされた年であった。

では、1960年の見出しの傾向を見ていきたいと思う。

3-2-1. 日刊スポーツ

1960年度の日刊スポーツは、4枚刷りの10円（ローマ五輪開催中は6枚10円）で販売され、休刊日は2日間（1/2、9/24）で363日発行された。

見出しの総数は7616個で、それぞれの見出しの内訳は、大見出しが398個、中見出しが708個、小見出しが5324個、写真が1186枚、そして図表は33個であった。また、扱っているスポーツ種は大・中・小見出し・写真の順に15、19、22、15種類であった。1951年と比べると見出しの数は減少し、スポーツ種も減少した。現在のスポーツ新聞の形態に近づいたといえる。

3-2-1-1. 大見出し

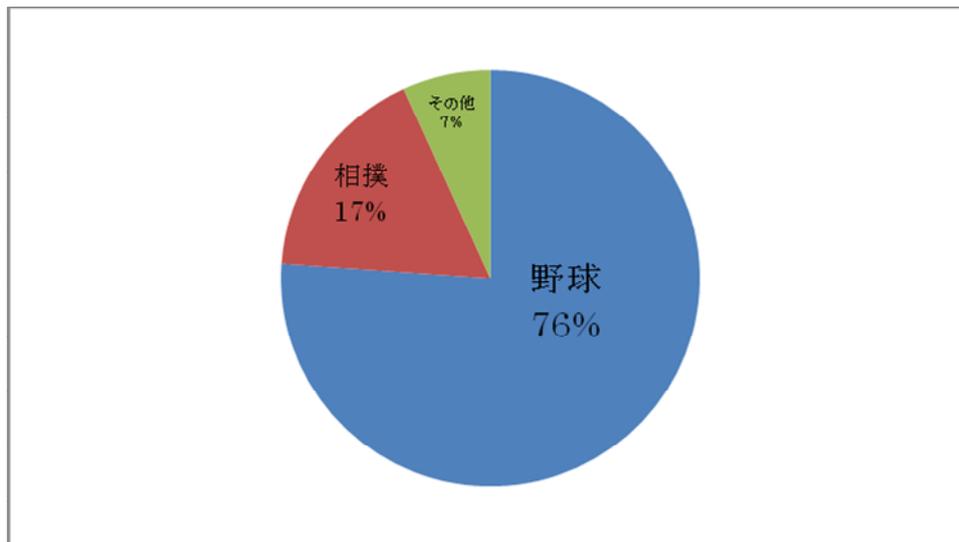
大見出しは1951年に引き続き、全て見出しは一つの文のように記されていた。次に扱われていたスポーツ種であるが、次頁の表7と図2を見てほしい。

一番多く扱われていた野球をさらに細かく分けると、プロ野球に関する見出しが275個と一番多かった。内訳は巨人が88個、セ・リーグが73個、パ・リ

表 7. 1960 年の日刊スポーツにおける大見出しのスポーツ種と個数

個数	スポーツ種	個数	スポーツ種
303	野球	1	マラソン
68	相撲		陸上
7	水泳		プロレス
4	ボクシング		新体操
3	体操		スキー
2	駅伝		射撃
	スピードスキー		登山
	五輪		

図 2. 1960 年の日刊スポーツにおける大見出しスポーツ種別割合



ーグが 94 個、その他が 20 個であり、この年は巨人に関する見出しよりもパ・リーグに関する見出しの方が多く見ることができた。

巨人は、新人・堀本律雄が、最多勝(29 勝)、沢村賞、新人王とタイトルを独占。防御率もリーグ 2 位の 2.00 という成績を収めた。一方でこの年を最後に、ベテラン別所毅彦がユニホームを脱ぎ、世代交代は着々と進んだ。別所は 7 月にはスタルヒンを抜いて当時の日本記録となる通算 304 勝を達成、シーズン終了時には、310 勝まで記録を伸ばした。しかしシーズンを通しては、チーム防御

率 3.09 とリーグ 5 位。チーム打率も .229 でリーグ最下位と低迷し、6 年ぶりにリーグ優勝の栄冠を他チームに譲ってしまった。優勝したのは、前年まで西鉄を率いて巨人を苦しめた三原脩が監督を務めた大洋だった。

その優勝した「大洋」は 23 回、「三原」が 4 回とセ・リーグの中では最多回数を数えたが、シーズン 2 位の巨人の 88 回には遠く及ばなかった。

そして、巨人よりも多い見出しを飾ったパ・リーグであったが、この年は大毎オリオンズが自慢のミサイル打線炸裂で 10 年ぶり 2 度目の優勝を果たした。特に 6 月にはプロ野球タイ記録となる 18 連勝の快進撃で 2 位以下を一気に突き放した。この結果「大毎」は 23 回大見出しで取り上げられ、主力打者の山内一弘は 8 回、驚異の月間 11 勝をマークした小野正一は 6 回登場するなど、チーム全体では 41 回と半数以上を数えた。しかし、当時の監督であった西本幸雄監督に関しては一つも見ることができなかった。

この他の競技で一番注目されるのが相撲である。大見出しで登場した回数は 68 回と、年 6 場所 90 日間で 3 分の 2 以上 1 面の大見出しで報道されたこととなった。この年の相撲界は、「世代交代」が目に見ることができる年であった。1950 年代の相撲界は、「栃若時代」と呼ばれ、栃錦と若乃花（初代）という二大横綱が互いに好勝負を演じ、相撲人気を高めていた。しかし 1960 年、栃錦は初場所で優勝したものの、この年限りで引退を表明。若乃花はこの年 3 回の優勝を果たすものの、永遠のライバルが引退してこの年を最後に優勝はなくなった。

一方で、この年に彗星のごとく現れたのが初場所で新入幕を果たし、いきなり敢闘賞を受賞した大鵬であった。大鵬はその後好成績を収め続け、11 月場所では初優勝を飾った。そんな大鵬と相性が抜群に良かった柏戸とともに、その後の「柏鵬時代」を築くきっかけとなったのが 1960 年であった。

大見出しの登場回数では、「栃錦」が 14 回、「若乃花」が 17 回、「大鵬」が 13 回、他は「若羽黒」6 回（うち「若羽」5 回）、「朝夕」6 回、「柏戸」4 回と続いた。現在のように、「若」や「栃」と省略して表記される事は「若羽」を除いて見られることがないのが特徴であろう。なお、取組結果に関する記事以外はなかった。

また、1960 年の 8 月にローマ五輪が開催されたが、その期間中（8/25～9/11）14 回も大見出しで取り上げられた。特に、「日章旗」（2 回）、「日の丸」（2 回）、「日本」（3 回）という表現が目立ち、個人の選手よりも国を押し出して紹介している事が分かった。

なお、1951 年には見る事の無かったプロレスに関する記事を大見出しで見る事ができた。4/16 の「力道の空手にダウン」である。第二回プロレスワールドリーグ戦の初日に、力道山・豊登組が外人組を撃破した記事を伝えていた。

3-2-1-2. 大見出し以外の見出し

中見出しであるが、扱っているスポーツ種に関しては 4 種目が新たに加わり 19 種目となった。増加したのはレスリング、競馬、走り高跳び、ハンマー投げであった。

レスリングは、ローマ五輪代表で、唯一の銀メダルを獲得した松原正之が 2 度登場した（「松原、決勝進出」9/5、「松原、銀メダル」9/6）。

競馬は、4 歳牝馬（現表記 3 歳）のスターロッチが、有馬記念を制した事で取り上げられた。なおスターロッチが記録した 4 歳牝馬の有馬記念優勝は、未だに破られていない。「ロッチ、初の快挙」12/19）。

紙面の変化からかもしれないが、1951 年と比べて圧倒的に中見出しの総数が減少したことがわかった（写真 2 を参照）。

小見出しに関しては、中見出しと比べて、砲丸投げ、走り幅跳び、フィギュアスケートが加わった。

砲丸投げと走り幅跳びは、共にローマ五輪における女子の競技結果を示したものであった (9/3)。

フィギュアスケートは、2月に開催されたスコーパーレー冬季五輪で、日本の佐藤信夫が12位であった事示したものであった(「佐藤12位 男子フィギュア」2/25)。

1960年は小見出しの数が1951年と比べて極端に少なくなったものの、中見出しの減少に比べれば大した変化を見る事はできなかった。しかし、この小見出しの減少は、次の写真数の増加より納得する事ができる。

写真は1186枚であった。1951年と比べても倍以上の数字になり、今回調べた中でも一番の多さを見せた。スポーツ種に関しては、大見出しと同じ種類のもものが扱われていた。

内訳としては、プロ野球と相撲で1028枚(巨人162、セ270、パ255、他109、相撲222)を占めた。

ここで大見出しと異なるのは、巨人、パ・リーグに関する写真よりも、セ・リーグに関する写真が多かった事である。一人の枚数が多いというわけではないが、大洋の三原監督を始め、様々な選手が一面を彩った。

また、相撲も90日間の中で222枚も写真が載せられた。取り組み中の写真はもちろんの事、支度部屋での表情も捉えられていた。

写真で登場した人物の上位は長島茂雄(巨人)62回、堀本律雄(巨人)50回、三原監督(大洋)38回、栃錦32回、大鵬25回であった。

この年を象徴するスター選手がやはり写真でも多く登場している事がわかるだろう。

続いて 1951 年には存在していなかった図表を見る事ができた。この年は 33 個あった。主に、五輪期間中の「国別メダル獲得数」や、移籍選手、新入団選手の成績が図表では記されていた。

最後に女性の記事に関してである。総数は 36 個で、大見出しでは 3 回扱われた。

この 3 回はスピードスケートと体操女子であった。スピードスケートは、スコバレー五輪の日本代表、高見沢初枝が 1000 メートルを始め 3 種目で入賞した事を伝える記事であった（「高見沢 1000 にも入賞」 2/23、「高見沢、3 種目に入賞」 2/24 写真 8）。

体操女子は、ローマ五輪で当時最高の 4 位入賞した際の記事であった（「日本女子は 4 位確定」 9/9）。

その他の女性選手は、ローマ五輪女子 100 メートル背泳ぎで銅メダルを獲得した田中聡子が 3 回、飛び込みの津谷鹿乃子が 2 回で、団体で 400 メートルメドレー、女子走り幅跳びが結果のみで 2 回ずつ記されていた。

しかし、これをみて分かる通り、女性の記事が扱われたのは全て五輪競技で、その期間中でしか一面では取り上げられていなかった。

以上が 1960 年の日刊スポーツの調査結果である。

3-2-2. 東京スポーツ

続いて、東京スポーツについてみていきたいと思う。この年の 4 月 2 日に東京スポーツは創刊され、2 枚 5 円で販売されていたわけであるが、国会図書館には所々欠品が見られ、具体的な休刊日を知る事はできなかった。今回調査対象としたのは、218 日分である。

見出しの総数は 3103 個で、一日に約 14.2 個見出しが載せられていた。大見

写真 8. 高見沢初枝が一面を飾った時の日刊スポーツ (1960.2.24)

2月24日 水曜日

日刊スポーツ

発行所：日刊スポーツ新聞社

〒100 東京都千代田区千代田1-1-1

電話：313-1111

代印所：日刊スポーツ新聞社

〒100 東京都千代田区千代田1-1-1

電話：313-1111

日刊スポーツ

2月24日

水曜日

第10000号

三千に四位 日本新

スノーボード 鷹野十位に食込む

オリピック

第六日

スノーボード

日本勢振わす

15キロアルスベーン 優勝

江連15位に

15キロ

特別メダル獲得表

高見沢三種目に入賞



0秒4差で日の丸速す

第六日目成績 (スケーター)

15キロ口経 難題克服

女子次回戦 (スケーター)

女子3000メートル (スケーター)

第五日目成績 (スケーター)

富士 はみなさんの銀行です。お気持にお越しくたさい。

きんぎょの運動

都会のタッチ!

柳屋チック

新築さまで販売

新発売

35記念デ-1号



昭和とともに生きた35年

ツノダが生れて今年で35年一文字通り昭和と共に生れ、生きてきました。だから、昭和の原動力はツノダの原動力ともいえるわけです。今やツノダは、自転車界のホープとして活躍してまいります。ツノダをこれまでに育てて下さった皆様への謝意の表しとして、すばらしい物産、非常にお値打ちな高級車ツノダの35記念デ-1号を先売いたします。お早めにお越し下さい。

販売・販売・販売をモットーとする

ツノダの自転車

ツノダ自転車株式会社

都会のタッチ!

柳屋チック

Yanagida Perfumery Co., Ltd.

Yanagida Perfumery Co., Ltd.

Yanagida Perfumery Co., Ltd.

出しは 385 個、中見出しは 516 個、小見出しは 2103 個、写真は 127 枚、図表は 12 個であった。また、扱っているスポーツ種は大・中・小見出し・写真の順に 11、12、20、7 種目であった。

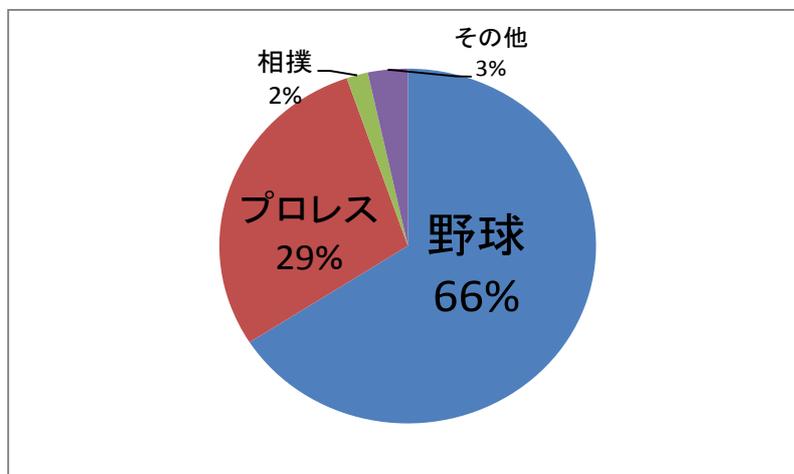
3-2-2-1. 大見出し

大見出しは一日に 1.8 個の割合で見ることができた。スポーツ種別であるが、以下の表 8 と図 3 を参考にしてほしい。

表 8. 1960 年東京スポーツの大見出しにおけるスポーツ種と個数

個数	スポーツ種	個数	スポーツ種
251	野球	2	水泳
110	プロレス		体操
7	相撲	1	競馬
5	ボクシング		水球
4	レスリング		マラソン
			重量挙げ

図 3. 1960 年の東京スポーツの大見出しにおけるスポーツ種別割合



まず野球であるが、内訳はプロ野球（245 個）のうち巨人（120 個）、セ・リーグ（67 個）、パ・リーグ（45 個）、その他（6 個）でアマ野球（6 個）は高校野球、大学野球、社会人野球がそれぞれ 2 個ずつであった。

結果の通り、巨人に関する記事が一番多く扱われていた。さらに細かく分析すると、「巨人」というチームについては 32 個、個人だと堀本律雄が 27 個と一番多かった。堀本を扱う場合、名前の「堀本」が 14 個だったが、「心臓男」、「精神力」といった他の言葉でも表わされており、27 個という数字になった。その他は、水原監督が 17 個、川上コーチが 13 個、長島茂雄が 5 個、別所毅彦が 3 個と続いた。シーズン中は堀本についての記事が多かったが、シーズン後に発生した水原監督の処遇問題で 30 日以上記事を割き、結果巨人の見出しが多くなったと考えられる。

この年優勝した大洋はチーム全体では 28 個で、「大洋」というチーム全体に関しては 5 個、個人では「三原」監督が 16 個「桑田」が 3 個という結果であった。三原監督と巨人・水原監督をライバル視する記事が目立った（例：「三原、水原のカケヒキ」8/29 など）

一方のパ・リーグであるが、優勝した大毎が一番多く 22 個、「大毎」は 9 個、「西本」が 3 個、「山内」が 5 個。そして当時大毎打線の愛称であった「ミサイル」が 1 個あった（「ミサイルと杉浦の対決」7/3）。

続いて多く見る事ができたスポーツは、プロレスで 110 個であった。そして最も多く表象されていたのが、当時の大ヒーローの力道山であった。力道山に関する見出しだけで 82 個あった。力道山に関しては様々な表記の仕方があり（「力道山」が 32 個、「力道」が 26 個）、中でも彼の技の象徴である「空手チョップ」の「空手」だけで力道山を表そうとする見出しが 5 個も見ることができた（例：「絶好調の“空手”」10/21 など）。他のレスラーは、豊登が 5 個、ワルド

ーが4個、イヤウケア（「ハワイの王子様」）が3個であった。1960年の末になると、イヤウケアの「ハワイの王子様」のように、レスラーを愛称で呼ぶ傾向が見えてきた。ラッキー・シモノビッチの「ユーゴの荒鷲」、サー・ダラ・シンの「インドの黒豹」などであった。

相撲は7個であるが、相撲協会が部屋別総当たり制を提言した事で2個（「どうなるか部屋別総当たり」7/5）、柏戸の大関昇進に関する問題で2個（「柏戸を狙う謀略」7/15）、他は大鵬、朝潮、若乃花に関するものであった。

ボクシングは、米倉健司（現・ヨネクラジム会長）が自信2度目の世界挑戦となるジョー・ベセラが持つ世界バンダム級の王座戦に関する事で全てを占めた。戦前の様子を5/15に「米倉に有利か？」と報じ、試合後は「米倉はリングの外で破れた」、「不運だった米倉」というように大見出しで報道した。

レスリング、水泳、水球、マラソン、体操は全てこの年に行われたローマ五輪での出来事であった。レスリングは、グレゴロマン・バンダム級の市口政光が金メダル候補であるという記事（「市口、バンダム級金メダルは有望8/29」）、フリースタイル・フライ級の松原正之が銀メダルを獲得した記事（「松原銀メダル獲得 9/8」）など4個あった。

水泳は、800メートルリレー予選で世界新記録を出した事（「日本チーム世界新記録」 8/31）、200メートル平泳ぎの大崎剛彦が銀メダルを獲得した事（「大崎初の日章旗」 9/1）の2個であった。

体操は、男子団体予選の様子（「日本トップに立つ」 9/7）、個人で小野喬が活躍した様子（「小野また金メダルか」 9/10）の2個である。他水球は、強豪エジプトと予選で引き分けたことで見出しとなり（「日本チーム、早くも健闘」8/27）、重量挙げは競技終盤に日本選手が追い上げを見せた事（「出るか、金メダル」 9/9）、マラソンは五輪の最終競技であった事（「日本チーム、最後の健闘」

9/11) から大見出しで取り上げられた。

3-2-2-2. 大見出し以外の見出し

中見出しについて見ていきたい。総数は 516 個で扱ったスポーツ種は大見出しよりから新たに 1 種目登場した。この 1 種類は五輪そのものであった。

大見出しでは五輪で行われた競技が多々取り扱われていたが、中見出しでは「ローマ五輪第〇日目」といった見出しが毎日中見出しで取り上げられ、その分扱ったスポーツ種が増えたと言える事ができる。

中見出しのスポーツ種別の数割合は、大見出しの時と変わらず、野球 (305 個)、プロレス (122 個)、相撲 (45 個)、ボクシング (8 個) と続いた。

では小見出しについてみたいと思う。小見出しは 2063 個で扱われたスポーツ種は 20 種類に及んだ。中見出しから増えたスポーツ種は、バスケット (4 個)、自転車 (4 個)、陸上 (10 個)、射撃 (3 個)、ホッケー (3 個)、ボート (3 個)、フェンシング (1 個)、馬術 (1 個) の 8 種目であり、その 8 種目は全て五輪で行われた競技であった。

陸上に関しては、トラック競技の他、女子円盤投げ、女子砲丸投げ、近代五種目、三段跳び、障害が、水泳に関しては平泳ぎ、背泳ぎ (男女)、板飛び込み (男女) とそれぞれ報じられていた。そして、この陸上と水泳の中で女性に関する記事を見つける事ができた。

その女性選手の中で唯一固有名詞を用いて名前が挙げられたのが女子板飛び込みの津谷かの子であった。しかし、彼女に関する記事は「馬淵、津谷選手、ローマで婚約」(8/29) と同じ板飛び込みの馬淵良との婚約を伝えた記事であった。また、その他陸上の女子円盤投げ、砲丸投げ、水泳の女子背泳ぎは結果だけであった。

余談ではあるが、当時の報道によると、馬術と射撃はあまり期待されていない事がわかった（「期待が薄い 馬術」、「入賞はまず無理 射撃」 9/6）。しかし射撃に関しては吉川貴久が男子フリーピストルで銅メダルを獲得しており、新聞の期待を良い意味で裏切る事となった。

写真に関しては、127 枚でスポーツ種は 7 種類であった。これは、野球（78 枚）、ボクシング（1 枚）、水泳（9 枚）、陸上（2 枚）、五輪（1 枚）、プロレス（33 枚）、レスリング（3 枚）である。

やはり、野球に関する写真が多く掲載されており、巨人に関するものが 22 枚、大洋が 12 枚、大毎が 11 枚であった。ここでも巨人について多く扱われている事がわかった。

女性に関しては、上で述べた津谷に関して 2 枚見る事ができた（「“だっちゃん” も応援？ 負けても元気な津谷、渡辺嬢」 8/29、「恋の飛び込み見事成功 喜びの津谷嬢」 8/30）。

最後に図表に関してである。図表は全部で 12 枚で、11 枚が野球で 1 枚が相撲であった。野球のチーム別だと、大毎に関するものが 8 枚と多く、他チームとの対戦成績や、チーム記録に関するデータが見られた（「大毎－南海対戦成績」 7/4、「大毎、オーダー別打率」 7/13 など）。相撲は、柏戸が大関に昇進した際に、過去 3 場所の成績を載せた表を見る事ができた（「柏戸の成績」 7/15）。

以上が 1960 年の東京スポーツについての調査結果である。

3-3. 1970 年

まずは 1970 年に起きた出来事を見ていきたい。スポーツでは、ラグビーの日本ラグビーフットボール選手権（現・日本選手権）において、日本体育大学が富士製鉄釜石を破り初優勝。東京箱根間往復駅伝大会の総合優勝と共に 2 冠を

達成した。5月には日本山岳会エベレスト登山会がエベレスト登頂に成功、8月には植村直己が世界初 5 大陸最高峰登頂に成功した。メキシコではサッカーのワールドカップが開催され、ブラジルが優勝。プロ野球は読売ジャイアンツが 6 年連続となる日本一を飾った。

社会問題としては、日本赤軍によるよど号ハイジャック事件を皮切りに、瀬戸内シージャック事件、アカシア便ハイジャック事件などが発生。また、「喜劇王」榎本健一、三島由紀夫が亡くなったのもこの年であった。しかし、大阪では日本万国博覧会が開催され、日本中が大きく盛り上がった年でもあった。

では、1970 年の見出しの傾向を見ていきたいと思う。

3-3-1. 日刊スポーツ

1970 年度の日刊スポーツは、6 枚刷りで販売され、休刊日は 4 日間(1/2、2/12、5/6、9/24) で 361 日発行された。

見出しの総数は 4675 個で、それぞれの見出しの内訳は、大見出しが 379 個、中見出しが 1018 個、小見出しが 2694 個、写真が 584 枚、そして図表は 0 個であった。また、扱っているスポーツ種は大・中・小見出し・写真の順に 12、13、14、12 種類であった。この年は今回調べた年数の中で一番見出しの数が少なく、そして扱っているスポーツ種が一番少ない年でもあった。

3-3-1-1. 大見出し

まず大見出しだが、1960 年に引き続き、全て見出しは一つの文のように記されていた。次に扱われていた種別であるが、次頁の表 9 と図 4 の通りであった。

この年も一番大見出しが多かったのは野球であった。そのうち、プロ野球に関する見出しが 305 個と一番多かった。内訳は巨人が 141 個、セ・リーグが 90

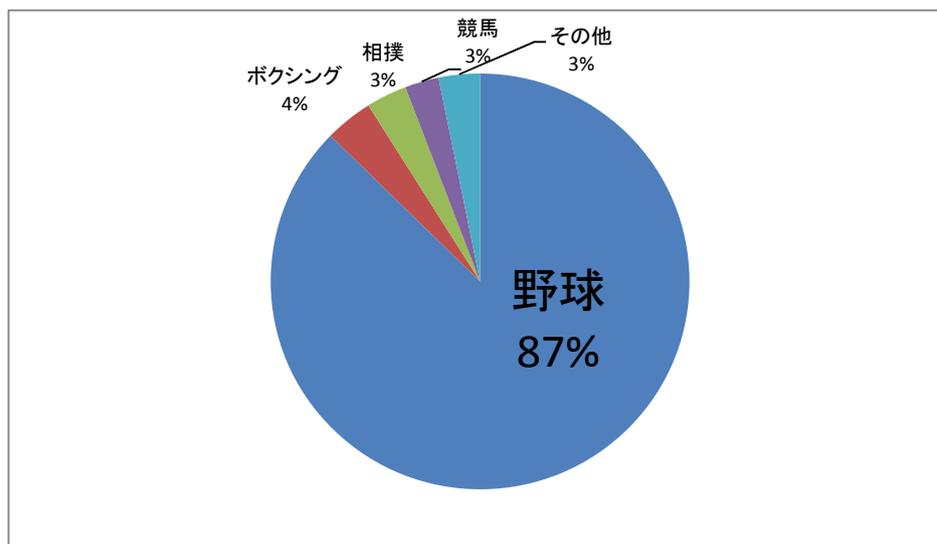
個、パ・リーグが 71 個、その他が 2 個であり、巨人に関する見出しが大半を占めていた。

巨人は、チームに関する話題が 58 個で一番多く、個人では王貞治が 47 個、長島茂雄が 23 個と ON で個人選手のほぼすべてを占めた。

表 9. 1970 年の日刊スポーツの大見出しにおけるスポーツ種と個数

個数	スポーツ種	個数	スポーツ種
331	野球	2	駅伝
14	ボクシング		マラソン
12	相撲	1	ラグビー
10	競馬		アイスホッケー
3	サッカー		スピードスキー
			クレー射撃
			登山

図 4. 1970 年の日刊スポーツの大見出しにおけるスポーツ種別割合



また 1970 年の野球界は、「黒い霧事件」から続く野球八百長問題が話題となった年であった。発端は 1969 年オフに球界初の永久追放処分を受け、雲隠れしていた永易将之であった。雲隠れ中に他の選手が関与している事を明言したり、

最後に所属していた西鉄球団からお金をだまし取ったりと紙面を賑わせた。そして永易に名前を公表された一人の池永正明も、この年の紙面を賑わした選手の一人であった。結局「黒い霧事件」から付随した野球八百長事件に関する記事は、永易が他選手の関与を明言した4月から池永が永久追放される6月までで14回を数えた。

この年は、本調査において初めてサッカーに関する見出しが登場した。これは日本サッカーリーグ(Jリーグの前身)と高校サッカーに関するものであった。まず高校サッカーに関する見出しは、浦和市南高校が高校サッカー大会を制し、高校三冠王を獲得したことを記した(1/8 写真6)。日本サッカーリーグは、第五回日本サッカーリーグ東西対抗戦において、小城が豪快なシュートで先制点を挙げたこと(「豪快、小城先制25メートルシュート」9/8)、リーグ戦で釜本邦茂所属するヤンマーが勝利し、元日決戦にもちこんだ記事であった(「釜本2発 ヤンマーに“女神”」12/31)であった。

1960年に見られなかった競技としては、競馬があげられる。競馬は、ダービー、天皇賞(秋)、ジャパンカップ、有馬記念に関して取り上げられ、各々の予想記事、本命馬について週に2,3記事書かれていた。具体的な馬は、タニノムーティエが2個、アカネテンリュウが3個、ムサシ、アローエクスプレス、シンボリ、メジロアサマが(各1個)取り上げられた。

その他の競技では、スピードスキーとクレ射撃が初めて登場した。スピードスキーにおいては、3月に行われた全日本スピードスキー競技大会で森下勝が自身新記録(当時)の161キロをマークし紙面に登場した(「森下、待望の160キロ突破」3/14)。

クレ射撃は、競技そのものでの登場ではないのだが、10月にクレ射撃協会の理事が賭博容疑で逮捕され、その事件をきっかけに日本体育協会から「ク

写真9. 浦和市南高校が高校三冠王を達成しときの日刊スポーツ (1970.1.8)

品 景 本 登

1月8日

日刊



日刊スポーツ

日刊スポーツ新聞社

東京 東京都千代田区千代田 3-14-1

電話 東京 3-34-11

編集 東京都千代田区千代田 3-14-1

印刷 東京都千代田区千代田 3-14-1

日刊スポーツ新聞社 〒100

(電話 3-34-11)

廣岡コーチ誕生
落ち目・ボクシング
喜劇王ついに死去

浦和市南 サッカー三冠王

高校選手権初芝くだし初優勝



大鵬、初場所も休場濃厚

復調のメド立たず

大鵬は、初場所も休場濃厚と見られる。復調のメド立たず。



高校離れの用兵

個性づくり交代もきびしく

夜の時点で
おしきん
平和相互銀行

1-0 永井千金のチール

初芝の猛反撃をかわす



MISSION

三ツツヨビユース

現代コミック

永高情二集

70

ホープニング・

デラックス特大号

1月16日号 ¥100

双葉社

スハイ

花と竜

書放

70日

目下軟派休業中

川上宗真

大佛次郎

鞍馬天狗

加納大尉夫人 佐藤愛

大暗 磯橋源平

レー射撃」が除名されることとなった（「クレ射撃を除名」11//6）。

このような大見出しの傾向となった。巨人に関する見出しが増え、それに応じて野球に関する見出しも増えたと考えられる。また、この年の大見出しでは、女性に関するものが一つも見ることができなかった。これは後述するが、この年の傾向は大見出しからも想像がつくように、野球、ボクシング、相撲、競馬の4競技でほぼ毎日紙面は彩られていた。

3-3-1-2. 大見出し以外の見出し

中見出しであるが、扱っているスポーツ種は大見出しからさらに1種目登場し13種目であった。増えた1種は、スキーであった。

スキーは、笠谷幸生（現・スキー連盟理事）が世界選手権で銀メダルを獲得した事（「笠谷、堂々の銀メダル」2/15）、登山家の三浦雄一郎がエベレストのサウスコル 8000m 地点からの滑降を成功させた（「エベレスト大滑降に成功」5/12）の2回であった。このスキーに関して扱った日の大見出しは2/15が「藤田コーチ謹慎処分」、5/12が「長島行けるぜ、三冠王」であった。

中見出しで扱われた種別数は、野球（906個）、ボクシング（34個）、相撲（33個）、競馬（22個）であった。野球に関しては、ひとつの大見出しで3つの中見出しが使われるという、かなり注目度の高さがうかがい知れる結果となった。

小見出しに関しては、1960年に比べて約半数減少し、スポーツ種目数は2種目減少した。この年の中見出しからは新たに1種目現れた。この1種目はスピードスケートで、鈴木恵一選手が2月に行われたISU スプリントスピードスケート選手権大会で失格となり優勝を逃した事で記事になった（「鈴木恵失格4連勝逃す 世界男子スピードスケート五百」2/15）。

小見出しで扱われた種別数は、野球（546個）、相撲（104個）、ボクシング（65

個)、競馬(35個)と続いた。特に野球は、セ・リーグに関するものが多く、巨人は少なかった。また全体的に1970年は、小見出しの数が極端に少なく、中見出しが多かった。

続いて写真は584枚であった。写真で扱われていたものは、大見出しと同じ12種類で、扱っていた物も同じであった。つまり、大見出しと写真はセットで紙面が構成されていた。

その内訳は、野球(287枚)、相撲(64枚)、ボクシング(48枚)、競馬(35枚)と続いた。ここでも小見出しと同じで巨人よりもセ・リーグの選手を扱う写真が多くみられた。巨人に関する写真は、大きな写真を載せることが多かったが、セ・リーグに関しては(パ・リーグも同じ)細かな写真を多く載せる傾向が見られたので、このような結果になった。

図表は54枚みられたが、全て野球に関するものであった。その内容としては、投手の成績や打撃成績、またプロフィール等を載せるものがほとんどであったが、王貞治のそのシーズンの本塁打の全配球、球種が書かれた図表があり(6/30)、わたくし個人としては、すごく驚かされた。

最後に女性に関する記事である。1970年の日刊スポーツでは、女性アスリートに関する話題どころか、女性を扱う記事がなかった。強いてあげるとすれば、黒い霧事件の主犯格・永易将之の母親の談話(「永易の母語る」3/10)、や男性アスリートの婚約の中でお嫁さんについての話題が少し登場するだけであった。

以上が、1970年の日刊スポーツに関する調査結果である。

3-3-2. 東京スポーツ

続いて、東京スポーツについて見ていきたい。1970年の東京スポーツは、5枚10円で販売され、357日発行された。

見出しの総数は 5825 個で、一日に約 16.3 個見出しが載せられており、1960 年と比較すると約 2 個増えた。大見出しは 720 個、中見出しは 866 個、小見出しは 3775 個、写真は 449 枚、図表は 39 個であった。また、扱っているスポーツ種は大・中・小見出し・写真の順に 5、7、9、4 種目と種目が減少した。

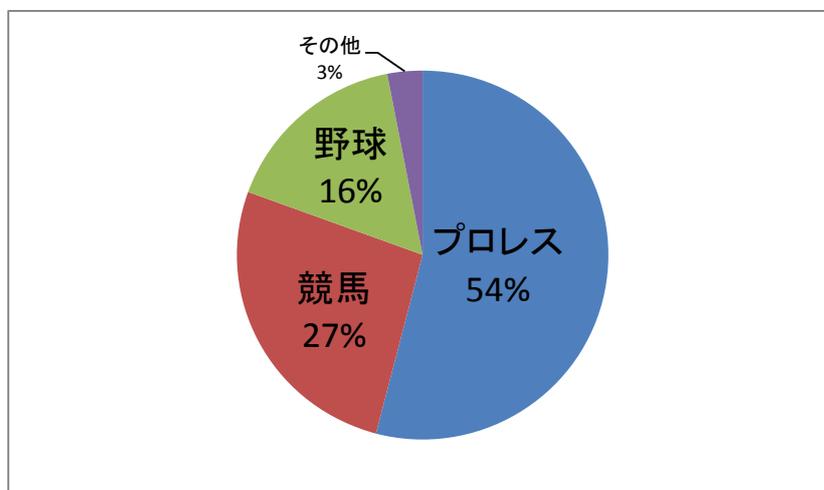
3-3-2-1. 大見出し

まず大見出しについてである。この年は一日に約 2 個の割合で大見出しを見る事ができた。スポーツ種別であるが、表 10 と図 5 を参照してほしい。

表 10. 1970 年の東京スポーツの大見出しにおけるスポーツ種と個数

個数	スポーツ種
389	プロレス
191	競馬
118	野球
21	ボクシング
2	相撲

図 5. 1970 年の東京スポーツにおける大見出しスポーツ種別割合



まず野球であるが、内訳はプロ野球（118個）のうち巨人（97個）、セ・リーグ（2個）、パ・リーグ（7個）、その他（9個）でアマ野球（3個）は高校野球（2個）、大学野球（1個）であった。

結果の通り、巨人に関する記事が一番多く扱われていた。しかし、その半分以上は「巨人内幕」、「巨人舞台裏」など、一面以降の面に掲載されている記事を読ませるための惹きつけ見出しが多く、記事が伴う見出しは17個しかなかった。その細かな内訳は、長島4個、堀内4個、藤田コーチ4個、王2個であった。

セ・リーグは、江藤慎一のヤクルト移籍を報じた事（「江藤、ヤクルト入り舞台裏」3/3）、荒川堯の三角トレードの真相を探る記事（「荒川堯三角トレの真相」10/10）の2つであった。

その他では、「オールスター舞台裏」という、先ほどの「巨人内幕」のような惹きつけ見出しが4個見られた。他は、この年球界を騒がせた黒い霧事件関連の記事であった（例：「国会 八百長6選手を召喚」4/8）

次に競馬を見てみたい。競馬は、191個大見出しで扱われたが、約半分の90個が「〇〇確定」という枠順の確定を報じるものであった。残りの101個が、週末に行われるレースの予想記事であった。

そしてこの年最も多く表象されたのはプロレスで389個であった。その中で多く表象されていたのが、ジャイアント馬場の163個で、次いで坂口征二の91個、アントニオ猪木の52個と続いた。

またこの年も1960年に続いて外国人レスラーの記事も目立った。しかも名前ではなく、各選手の愛称がほとんどであった。一番多かったのは「怪囚人」ことザ・コンビクトの14回である（「怪囚人ロス潜入 謀略特練へ突入」3/26、「怪囚人ら8殺し屋昨夜襲撃」4/3など）。次いでフリッツ・フォン・エリック

の「鉄の爪」で、この年は 11 回「鉄の爪」表記で登場（「鉄の爪昨夜来襲、早くも秘密行動」 2/29 など）。「人間発電所」の異名を持つブルーノ・サンマルチノは「発電所」で 6 回登場した（「発電所王座防衛 怪力復活の逆転」 3/18 など）。その他も「魔術師」のエドワード・カーペンティア、「呪術師」のアブドラー・ザ・ブッチャーが 4 回ずつ登場した。

ボクシングは、この年から「日本ボクシング黄金時代」が築かれ、その中心選手 5 人が大見出しを飾った。まずは WBA 世界フェザー級王者の西城正三が 8 個（「西城 KO 逸した真相 3 度目の防衛」 2/10 など）、この年に WBC 世界ジュニアライト級王座を獲得した沼田義明に関する記事が 5 個（「沼田勝利に 3 つの秘密」 4/7 など）だった。他、WBA 世界フライ級王座を 10 月に獲得した大場政夫（「大場 9 月世界フライ級に挑戦」 5/18）、WBC 世界フェザー級王者の柴田国明（「柴田“世界”奪取の秘密」 12/14）、WBA 世界ジュニアライト級王者の小林弘（「小林世界戦詳報」 8/25）は各 1 個ずつであった。

このように、プロレス、野球、競馬の 3 つで大見出しは構成されていた。特に週末の競馬の枠順が確定する木曜日は「〇〇確定」の見出しが毎週登場し、翌金曜日は予想記事であった。そしてそれ以外はプロレスの記事が中心であり、稀にプロ野球の記事が登場するというパターンが一年中見る事ができた。

続いて中見出しに関してである。総数は 866 個で扱ったスポーツ種は大見出しよりも 2 つ多い 7 種類であった。この 2 種類は、競輪と小説物であった。

ただし競輪は、大見出しの所でも登場した惹きつけ見出しであった（「23日の競輪詳報」 9/25）。

一方の小説物も、今後紙面で連載する小説に対する予告であった（「北原武夫氏の官能小説登場」 4/23）。

3-3-2-2. 大見出し以外の見出し

中見出しのスポーツ種別の数割合は、大見出しの時と変わらず、野球(68個)、プロレス(612個)、競馬(167個)、ボクシング(10個)、相撲(3個)と続いた。プロレスの記事の豊富さが、この数から見てとれるだろう。

では小見出しについてみたいと思う。小見出しは3775個で扱われた種類は9種類だった。中見出しから新たに現れたものは重量挙げ(2個)、政治(1個)、登山(1個)で、競輪は小見出しでは扱われていなかった。

重量挙げは、1968年のメキシコ五輪で銅メダルを獲得した三宅義行(兄は同五輪金メダリストの三宅義信)が、この年米国で行われた世界重量挙げ大会で、興奮剤を使用したとの事で失格となった事がとりあげられていた(「三宅弟の入賞失格」、「世界重量あげ興奮剤問題」 9/18)。

政治は、元自民党幹事長の川島正次郎氏の死去が報じられた。川島氏は日本プロレス協会のコミッショナーを務めており、また東京スポーツ新聞社の名誉顧問でもあった。その関係で、この年唯一の訃報記事を掲載している(「川島正次郎氏死去」 11/10)。

登山は、この年の5月11日、日本山岳会エベレスト登山隊が東南屋根の登山ルートをたどって、登頂に成功した。この登山隊には植村直己も含まれていた(「日本隊エベレスト登頂に成功」 5/15)。

また、中見出しで登場した小説だが、6/16から年末までほぼ毎日(10日間だけ欠)掲載されていた。第一弾が「実名小説シリーズ、小説・長島茂雄」で94回、9/22からは「実名小説シリーズ、小説・王貞治」が79回、12/13からは「小説・巨人軍」がスタートした。この小説が掲載されている時は、必ず2~3個小見出しが設けられており、今回は502個という数に上った。

小見出しの数割合は、野球(142個)、プロレス(2501個)、競馬(563個)

小説 (502 個)、ボクシング 55 個であった。プロレスの見出しの数が圧倒的な数となった。野球は競馬、小説よりも少ない数であった。

写真に関しては、449 枚でスポーツ種は 4 種類であった。これは、野球 (11 枚)、プロレス (396 枚)、ボクシング (9 枚)、競馬 (8 枚) である。

やはり、今まで見てきたとおり、プロレスに関する写真がかなり多く掲載されていた。特に馬場に関する写真が最も多く 116 枚であった。これは力道山同様、名前以外の呼称でも表記されており、得意技の 16 文キックから「16 文」や、ヤシの実割りから「ヤシ」、脳天唐竹割りから「脳天」などと書かれていた (「馬場」94 枚、「16 文」14 枚、「ヤシ」2 枚、「脳天」6 枚)。他は坂口が 60 枚、猪木が 48 枚であった。外人レスラーではドリー・ファンク・ジュニアが「ジュニア」で 16 枚が最多で、他多数の外人レスラーが少しずつ枚数を重ねていった。

最後は図表である。図表は 39 枚で、36 枚がプロレスで 2 枚が野球、1 枚がボクシングであった。プロレスは、全て得点表と今後のシリーズ日程 (「NWA タッグ・リーグ血戦日程」、「NWA タッグ・リーグ得点表」など) など、各シリーズで毎回掲載されていた。

野球は、日本シリーズのスタメン予想 (「第 1 戦スタメン予想」 10/27)、ドラフト会議での指名選手一覧 (「1 2 球団指名第一次選手」 11/10) であった。

ボクシングは、小林の世界戦の防衛記録をまとめたもの (「小林の世界戦防衛記録」 8/25) であった。

以上が 1970 年の東京スポーツについての調査結果であった。

3-4. 1980 年

1980 年に起こった出来事について簡単に触れる。スポーツでは、2 つの五輪が開催された。冬季五輪はアメリカのレークプラシッドで、夏季五輪はロシア

のモスクワでそれぞれ開催された。しかし、日本はモスクワ五輪をボイコットし、選手が参加する事はなかった。ゴルフ界では6月に「世界のアオキ」こと青木功が全英オープンで日本人最高の2位入賞という記録が誕生。プロ野球は広島東洋カープが日本一に輝き、低迷した巨人は長島茂雄監督の辞任、王貞治の引退と2つの衝撃ニュースを残した。

社会問題としては、一億円拾得事件や大平内閣のハプニング解散、そして大平正芳首相の急死などの話題があった。また芸能では「昭和の爆笑王」林家三平が亡くなり、ジョン・レノンも暗殺された。そしてアイドル・山口百恵も引退し激動の80年であった。明るい話題としては、日本で第一回目のホワイトデーが実施された年であった。

では、1980年の見出しの傾向を見ていきたいと思う。

3-4-1. 日刊スポーツ

1980年度の日刊スポーツは、8枚刷りで販売され、休刊日は5日間(1/2、2/3、8/4、10/5、11/10)で361日発行された。

見出しの総数は6191個で、それぞれの見出しの内訳は、大見出しが361個、中見出しが378個、小見出しが4473個、写真が575枚、図表が420個であった。また、扱っているスポーツ種は大・中・小見出し・写真の順に15、18、26、17種類であった。この年は1つの大見出しとそれに追随する中見出しが1、2個ずつと、近年に近い紙面編成であった。また、見出しの大きさが大きくなるにつれて扱うスポーツも多くなることがわかった。

3-4-1-1. 大見出し

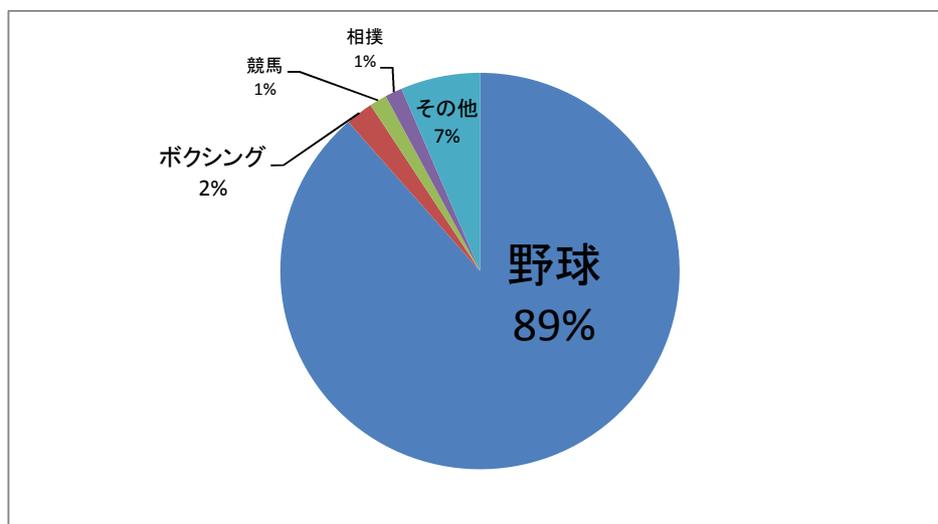
大見出しだが、全ての見出しは一つの文のように記されていた。これは1970

年とも同じ傾向が見られた。次に扱われていた種別であるが、表 11 と図 6 を参照してほしい。総スポーツ種は 15 種類であった。

表 11. 1980 年の日刊スポーツの大見出しにおけるスポーツ種と個数

個数	スポーツ種	個数	スポーツ種
317	野球	3	柔道
			マラソン
8	ボクシング		1
		競馬	
5	相撲	登山	
		スキージャンプ	
4	五輪	社会問題	
	芸能		

図 6. 1980 年の日刊スポーツにおける大見出しスポーツ種別割合



やはりこの年も一番多かったのは野球であった。プロ野球 (275 個) の内訳は巨人が 139 個、セ・リーグが 58 個、パ・リーグが 62 個、その他が 16 個であり、巨人に関する見出しが大半を占めていた。アマ野球は 41 個で高校野球 (29 個)、大学野球 (7 個)、社会人野球 (5 個) であった。

巨人は、一年を通して話題を欠かさない年であった。シーズン前は青田昇へ

ッドコーチの野球賭博疑惑で紙面を賑わせた。そしてシーズン中は、長島茂雄監督の6年目シーズンで2年ぶりの優勝を目指した年であったが、序盤に優勝戦線から離脱。2年目の江川卓や4年目の中畑清らの台頭でなんとかAクラス入りを確保した。シーズン終了後は長島監督の解任や、王貞治選手の22年の現役生活にピリオドを打った事が話題の中心となった。

見出し語で一番多く登場したのは巨人というチームに関する事と、江川卓に関する事で、それぞれ32個ずつであった。江川はこの年16勝をあげ最多勝を獲得するも、不安定な投球で登板日の翌日はほぼ毎日一面を飾った。それ以下は王貞治が25個、長島茂雄が21個、青田昇が11回と続いた。

この年は、以前の見出しとは異なる点が多々見ることができた。

まずは競技以外で五輪に関する記事が出た事が大きなポイントであった。1980年は、夏季五輪がモスクワで開催されたが日本はアメリカに従いボイコットを決めた。アメリカがボイコットを宣言した翌日の1/22(「米国が五輪拒否」、その翌日1/23(「山下の参加願い」、日本政府がボイコットを決めた翌日の2/2(「モスクワ五輪 不参加要望」とJOCがボイコットを決めた翌日の5/25(「日本五輪断念」)に五輪関連記事として一面を飾った。

また、初めて登場する種類がいくつか見ることもできた。そのひとつが芸能に関する記事である。この年は4個あったが、そのうち3個は山口百恵に関するものであった(3/8「百恵、友和 11.19 挙式」、10/16「百恵さわやか」、11/20「百恵 涙の花嫁」)。そしてもう一回は12/10のジョン・レノン暗殺に関する記事であった(「レノン暗殺」)。この年から、姓ではなくて名で表象する傾向がみられるが、これ以降も冠婚葬祭問わず、芸能に関する記事は増加し、女性を表記する際は名のみを示す記事が多発する一途をたどるのであった。

芸能以外では、スキージャンプとボートに関する見出しである。ちなみに、

1980年以外では、一度も大見出しでは飾られていなかった。スキージャンプは4個もあったが、全てレークプラシッド五輪での八木弘和選手に関するものであった（「八木 金予約飛行」 1/31、「八木 銀飛行」 2/19など）。一方のボートは、年末に隅田川でボートの川下りが行われるという記事であった（「隅田川に英国名物」 12/30）。

また、例外的に特徴のある見出しを見ることができた。それは、王貞治、野村克也という二大スターが引退した時である。普段の見出しはコンピューターの字体であるが、その両日（11/9、16 写真 10、11）だけ、本人の直筆で見出しが書かれていた。これは、後にも先にも見ることはできなかった。

次に中見出しであるが、扱っているスポーツ種は大見出しから2種目増えた17種目であった。増えた2種は、スピードスケートと陸上である（各1個）

スピードスケートは、レークプラシッド五輪で、ハイデンが全種目制覇した際の記事（「ハイデン、完全制覇」 2/18）で、陸上は、五輪こそボイコットのために出場することはできなかったが、その後のマラソンで1位となった瀬古利彦に関する記事であった（「瀬古世界一」 9/21）。

3-4-1-2. 大見出し以外の見出し

中見出しの種別数は、野球（324個）、ボクシング（9個）、競馬（8個）、相撲（6個）、スキージャンプ、五輪（各5個）であった。中見出しに関しては、大見出しの数と比例した傾向となった。

小見出しに関しては、1970年に比べて2000個近く増加し、スポーツ種目数に関しても11種目も増加した。また、この年の中見出しからは新たに8種目加わった。小見出しになって増えたスポーツは、アイスホッケー（5個）、サッカー（4個）、競輪（3個）、水泳、バレーボール（各2個）、テニス、体操、新体

写真 11. 野村克也が引退を表明した事を報じる日刊スポーツ (1970.11.16)

11月16日
昭和45年
11月16日
日刊 7版

日刊スポーツ

生涯一捕手

見出しは野村選手の自筆

野村に終符

30日別れの時涙を浮かべ...

コロンビア
背中に19が
しめつけて
しめつけて



手勢をまどぼく
たぐりでも買えない

入道 野村 克也

評論家へ転身

野村選手は引退後、評論家として活躍する。...

マスク越しに人生見た



生涯一捕手

27年間・45歳「月見草」は散った

野村選手は引退後、月見草というペンネームで活躍する。...

40年三冠

野村選手は引退後、特別優待で300万円、野村證券を設立する。...

特許明

通信教育講座

オセロゲームで一億円

操（各 1 個）であった。

アイスホッケーは、レークプラシッド五輪で日本代表が惨敗した事（2/24）と西武鉄道アイスホッケー部関連の記事（日本リーグ勝利、優勝など 12/1、14、15、26）であった。

競輪は、中野浩一関連の記事に終始した。世界選手権のプロ・スプリントで史上 5 人目となる 4 連覇を果たした時（9/9）、オールスター競輪で優勝した時（10/1）、日本プロスポーツ史上初の年間獲得賞金額 1 億円を突破した時（12/9）であった。

またこの年、新体操が初めて登場した（11/25）。

小見出しの種別数は、野球（3833 個）、ボクシング（96 個）、相撲、五輪（各 86 個）、競馬、芸能（各 72 個）であった。数字を見ればわかるように、野球に関する見出し数が圧倒的な多さを見せて、「野球機関紙」の様相を見せた。

1970 年は小見出しの数が極端に少なく、中見出しが多かったが、1980 年は真逆の結果となった。1960 年に戻った紙面構成ともいえるだろう。

続いて写真は 575 枚であった。写真に関しては、中見出しと同じスポーツ種目のものが扱われており、野球に関するものが 512 枚とほぼ野球が占めた結果となった。1970 年に比べると、僅少の減少を見せたが、これは次に説明する図表の登場の影響もあると考えられる。

最後に図表であるが、420 枚も見ることができた。この年は高校野球（全国高等学校野球選手権大会）の記事が増加し、その点において図表の割合が増加した。（例：過去の対戦成績、荒木・愛甲の比較等）プロ野球も同様に、新人の成績比較や、打撃成績などを図表化して載せることが多くなった。

女性の記事に関しては、総数が 83 個で、大見出しでは 5 回扱われた。

上記した山口百恵が 3 回で、他は渡部絵美（「絵美、金盤に咲け」2/20）、山

口香（「銀だ 15 歳、女三四郎」 12/2）の計 5 回であった。

また、スポーツ選手以外では、スポーツ選手の妻や恋人に関する記事も多々あった。83 個中 48 個はそうであった。「○○選手の妻」「プロ野球選手の妻」などといった特集記事が多くあったのも 1980 年の特徴といえるだろう。

以上が 1980 年の日刊スポーツに関する調査結果であった。

3-4-2. 東京スポーツ

続いて 1980 年の東京スポーツについて述べていきたい。この年は 12 枚 10 円で発行され、毎週日曜日が休刊日であった事から 308 日の発行であった。

見出しの総数は 4145 個で、一日に約 13.4 個見出しが載せられており、1970 年と比較すると約 3 個減少した。大見出しは 308 個、中見出しは 596 個、小見出しは 2460 個、写真は 618 枚、図表は 63 個であった。また、扱っているスポーツ種は大・中・小見出し・写真の順に 5、10、19、8 種目と、種目が減少した。

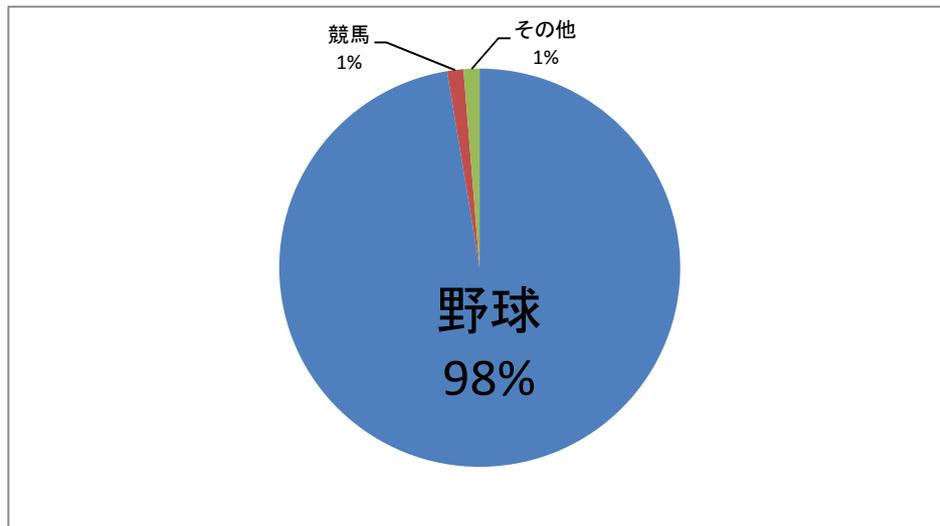
3-4-2-1. 大見出し

まず大見出しについてである。この年は一日に 1 個の割合で大見出しを見る事ができた。スポーツ種別であるが、表 12 と図 7 を見てほしい。

表 12. 1980 年の東京スポーツの大見出しにおけるスポーツ種と個数

個数	スポーツ種
300	野球
4	競馬
2	プロレス
1	ゴルフ
	社会問題

図 7. 1980 年の東京スポーツにおける大見出しスポーツ種別割合



まず野球であるが、内訳はプロ野球（268 個）のうち巨人（174 個）、セ・リーグ（51 個）、パ・リーグ（24 個）、その他（19 個）でアマ野球（32 個）は高校野球（13 個）、大学野球（15 個）、社会人野球（4 個）であった。

上の数字を見て分かるように、野球に関する記事がほぼ毎日報道されており、特に巨人に関する記事が一番多く扱われていた。巨人というチーム全体については、35 個の見出しが見られた。一方個人では、長島茂雄監督が 53 回、この年最多勝に輝いた江川卓が 47 回、シーズン終了後に引退を決意した王貞治が 38 回と、この 3 人が一面を占めていた。内容は、デーゲームを除いてほぼ選手・監督の様子を知らせるものが終始していた。特に江川に対する記事は辛辣であった（「完封江川不合格！」 5/1、「江川病、巨投を汚染」 5/20 写真 12 など）。この年の巨人は開幕から「赤ヘル軍団」広島カープの後塵を拝し、シーズンは 3 位。見せ場もなく終わったにも関わらず、この見出しの数であった。

広島が優勝したセ・リーグは、優勝した広島ではなく阪神が半分以上を占めた。阪神はチームが 6 個、エース小林繁が 10 個、ルーキーの岡田彰布、主砲掛布雅之が 5 個ずつだった。一方広島は、江夏豊の 8 個、古葉竹識監督の 4 個と

写真 12. 江川に対する辛辣な見出し (1980.5.20)

株の神様 20日 登場
巴川製紙 総仕あげ指南
 ミスター 珍鋭な株値予知に大反響

大熊世界戦に重大謀略
ダービー総力特集第1弾

江川 投を汚染

5月20日(日) 10日発行
東京スポーツ
 1部30円

東京スポーツ
 1部30円

死亡率 なんと 4割!

東スポの創刊20周年記念
超ビッグセール
 第3弾

新車 富士通 Family Van

近江日本リースト提供

遂に新浦も慢性患者



長島 悲鳴も消え絶句

今季すでに119失点中59点が一発、31試合で36本

長島 悲鳴も消え絶句

03 258-1441
 日南カーリースト

なぜ信じられん球を

なぜ信じられん球を

別冊 117

矢野龍渓の青春

6か月で賃格が激れる

6か月で賃格が激れる

計 12 個にとどまった。チームが強いから見出しが多くなるとは限らないことが見て取れる。

またこの年は、アマ野球で多くの大見出しが登場した。これは、高校野球では全国高等学校野球選手権で優勝した横浜高校の愛甲猛、大学野球では東海大学の原辰徳などドラフト候補が紙面を賑わしたからである。特に原は年初から紙面に登場し（「原（東海大）留年も」 1/29）、大洋との関係の強さも記事からは垣間見ることができた（「原⇄大洋鉄壁人脈」 7/30）。しかしドラフトが終わってみれば「原史上最高 8 千万」（11/28）で巨人軍に入団し、現在は監督として球界を代表する人物となった。

次に競馬を見てみたい。競馬は、G1 レースの前に予想、または馬の出走状況について 4 個見出しに登場した。その G1 レースは、東京優駿（「カチドキ出走取消し」 5/25）、菊花賞（「乱菊、5 枠 2 騎」 11/9）、天皇賞（秋）（「超大穴アラナス Z 旗」 11/23）、有馬記念（「5 サーペン買い！」 12/21）であった。

そして 1970 年に圧倒的個数を誇っていたプロレスでわずか 2 個と激減した。その 2 個はいずれもアントニオ猪木に関するもので、ウィリー・ウィリアムスとの試合を報じたもの（「骨折、脱臼のドロウ」 2/29）、NWA ヘビー級選手権をアメリカで防衛した時（「猪木 KO 防衛」 8/12）の 2 つであった。

ゴルフは、青木功が 6 月の全米オープンゴルフで日本人最高の 2 位を記録した時の記事の 1 つであった（「青木栄光の 2 位」 6/17）。

政治は、現職首相の死去という前代未聞の事態を招いた大平正芳首相の死去を報じたものであった（「大平首相けさ急死」 6/13）。

このように、1970 年とは正反対の結果を見ることができた。野球、特に巨人に関する記事が一年を通してみることができ、しかも試合結果ではなく半ばゴシップ性の強い記事が目立った。一方のプロレスに関しては、ジャイアント馬

場、アントニオ猪木らスターは存在し、まだまだ一線級の活躍を見せていたが、2個にとどまった。これは全日本プロレスと新日本プロレスという2つのメジャー団体に分かれた事で話題が分散したことが一つの原因であると考えられる。

3-4-2-2. 大見出し以外の見出し

中見出しに関して見てみたい。総数は596個で扱ったスポーツ種は大見出しよりから新たに5つ加わった10種類であった。この5種類は、芸能(6個)、ボクシング(4個)、相撲(2個)、スピードスケート(2個)、バレーボール(1個)であった。

芸能記事は、今回の研究で初めての登場となった。内容は、オリビア・ハッセーと布施明の婚約報道(1/30)、山口百恵のハワイ旅行追跡報道(「百恵もハワイで拳銃ぶっ放す」7/5)、ジョン・レノンの暗殺(「レノン、暗殺」12/11)など6個報道された。

ボクシングは、WBA世界ジュニアフライ級王者の具志堅用高が4個報じられた。同タイトル12度目の防衛に成功した時(6/3)、13度目の防衛に成功し、日本人最多防衛回数を更新した時(10/13)というボクシング関連の記事や、婚約、結婚報道も中見出しで取り上げられた。

またスピードスケートでは、渡部絵美が登場した。渡部はレークプラシッド五輪に女子スピードスケート代表で出場し、6位入賞を果たした(「絵美、入賞」2/22)。その翌日、激戦から一夜明けた渡部を報じた記事では(「えみちゃん、満面の笑み」2/23)、「えみちゃん」という愛称で呼ぶ見出しをつけていた。

中見出しのスポーツ種別の数割合は、大見出しの時と変わらず、野球(518個)、プロレス(29個)、ゴルフ(20個)、競馬(13個)、政治(1個)と続いた。野球の記事の豊富さが、この数から見てとれるだろう。

では小見出しについてみたいと思う。小見出しは 2460 個で扱われた種類は 19 種類だった。中見出しから増えたものとして、柔道 (4 個)、水泳 (1 個)、スキージャンプ (3 個) 大回転 (1 個)、マラソン (1 個)、皇室・王室 (1 個)、五輪 (9 個)、陸上 (1 個)、体操 (2 個) であった。皇室・王室を除いて、この年行われたレークプラシッド五輪、モスクワ五輪での競技結果が報道された。

まず五輪関係であるが、これはモスクワ五輪に日本がボイコットするかしないか協議する記事が 9 個占めた (結果ボイコット)。

それに関して、柔道の山下泰裕が涙の訴えをした記事(3/9)、モスクワで観戦している様子を表す記事 (7/29)、そして五輪で優勝した北欧選手に関する記事 (7/30,31) の 4 個であった。

体操では、「白い妖精」ことナディア・コマネチが 2 度登場した。モスクワ五輪で個人、団体ともに銀メダルを獲得した記事が載せられた (7/23,25)

スキー大回転は、レークプラシッド五輪のステンマルクの優勝、ジャンプは日本代表の八木弘和の五輪で競技するまでの経緯について 3 回記事となっていた。

皇室・王室は、日本ではなくイギリスにおける記事であった。故ダイアナ元妃 (当時は保育士) とチャールズ皇太子の恋愛報道が書かれていた。

他の小見出しの数割合は、野球 (2096 個)、プロレス (49 個)、競馬 (118 個) ゴルフ (108 個)、ボクシング 9 個であった。野球の見出しが 1970 年のプロレスと同じくらい圧倒的な数となっており、ほぼ毎日野球に関する記事が書かれている事が分かる。

写真に関しては、618 枚でスポーツ種は 8 種類であった。大見出しと異なるのは、芸能、相撲、五輪が各一枚ずつであった。

芸能は、定岡正二と交際が噂されたセーラ・ローエルが女性唯一写真で登場した。

やはり、今まで見てきたとおり、野球に関する写真が 605 枚とかなり多く掲載されていた。特に巨人に関する写真が最も多く 344 枚であった。大見出しの個人に見られた数と同様、長島、江川、王の順番に写真の枚数が分かれた。

最後は図表である。図表は 63 枚で、野球は 54 枚で、競馬が 9 枚であった。野球の中で高校野球が 3 枚登場した。これは、愛甲と荒木大輔の決勝戦における両者の体格比較、成績比較等で用いられた。

また競馬は、各見出しで用いられており、その時注目された馬の全成績、騎手の成績が表として掲載されていた。

以上が 1980 年の東京スポーツについての調査結果である。

3-5. 1990 年

1990 年に起きた出来事について触れたい。スポーツでは、大相撲で森山真弓文部大臣（当時）が優勝賜杯の授与を断られるという事が起きたが、横綱・千代の富士が史上初の通算 1000 勝を記録するなどおめでたい話題もあった。プロ野球は、西武ライオンズが読売ジャイアンツを 4 勝 0 敗で退けて日本一となった。またメジャーリーグではノーラン・ライアンが史上最多、最年長となる 43 歳でのノーヒットノーランを達成した。サッカーはワールドカップが開催され、西ドイツが 3 度目の優勝を飾った。

社会問題としては、第一回目となる大学センター入試が実施され、現在まで続いている。皇室・王室関連では礼宮文仁親王がご結婚し秋篠宮家を創設、そして今上天皇の即位の礼が行われた。12 月には TBS 記者の秋山豊寛が日本人初の宇宙飛行に成功した。

では各見出しについて見ていきたいと思う。

3-5-1. 日刊スポーツ

1990年度の日刊スポーツは、20枚刷りの90円で販売され、休刊日は3日間の362日発行された。両面1面（表と裏の2面で1つの1面となっている事）の日は18日あり、内訳はプロ野球が7日（6/11、9/8、9/9、9/10、9/17、10/21、10/24）、競馬が5日（5/28、10/27、10/28、12/22、12/24）、ゴルフ（5/7）、相撲（7/23）、ボクシング（7/30）、F1（10/22）、皇室・王室（11/13）、芸能（11/29）がそれぞれ1日であった。

見出しの総数は6632個で、それぞれの見出しの内訳は、大見出しが362個、中見出しが416個、小見出しが4856個、写真が595枚、図表が403個であった。また、扱っているスポーツ種は大・中・小見出し・写真の順に19、18、27、19種類と見出しの大きさが大きくなるにつれて扱うスポーツも多くなることがわかった。

3-5-1-1. 大見出し

大見出しで扱われていたのは19種類で内訳は次頁の表13、図8を見てほしい。

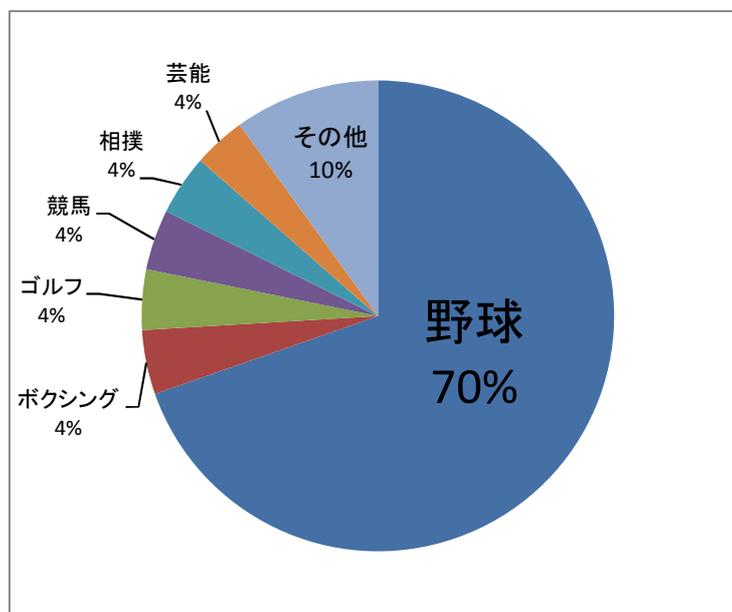
野球であるが、プロ野球に関する見出しが231個と一番多かった。内訳は巨人が84個、セ・リーグが47個、パ・リーグが79個、その他が21個であり、巨人とパ・リーグがほぼ同数であった。

まず巨人に関してだが、当時は藤田元司監督政権下で、その年の優勝を果たした。チーム関連の見出しは15個だった（「巨人 真っ白」1/31、「巨人前夜祭 藤田監督(両面)」9/8など）。しかしこの年に一番紙面を賑わしたのは、当

表 13. 1990 年の日刊スポーツの大見出しにおけるスポーツ種と個数

個数	スポーツ種	個数	スポーツ種
252	野球	2	マラソン
	相撲		F1
16	水泳	1	皇室・王室
	ボクシング		陸上
	体操		やり投げ
13	駅伝	1	駅伝
	ラグビー		体操
7	社会問題	1	アメリカンフットボール
	サッカー		登山
5	プロレス		

図 8. 1990 年の日刊スポーツにおける大見出しスポーツ種別割合



時プロ 5 年目の桑田真澄であった。年始から登板日漏洩疑惑が取りだたされ、それに関する記事を含め 27 個取り上げられた（「桑田会見」 3/16、「桑田決裂」 12/8）。藤田監督が 8 個、斎藤雅樹が 5 個と続いた。

そして、次に多いパ・リーグは、野茂英雄関連が 11 個、清原和博が 10 個、西武ライオンズ、田淵幸一監督が 8 個と続いた。1980 年に比べてパ・リーグに関する記事が増えた理由として、1990 年はスター選手といわれる選手が多数パ・リーグに在籍していた事が大きな要因の一つであると考えられる。

1980 年から急激に増えたものとして、ボクシングとゴルフがあげられる。共に 80 年は 8 個、3 個であったが、90 年は 16 個、15 個と増加した。ボクシングはマイク・タイソンが日本で初めて試合をした関係もあり 12 個を数えた（「タイソン上陸」 1/17 など）。

またゴルフにおいては、プロ入り 2 年目で年間 3 勝を挙げた川岸良兼が 6 個（1/12、3/3 など）とベテランの尾崎将司が 4 個（「尾崎 V」 5/7 など）、中嶋常幸が 3 個（「中島日本一」 10/8 など）の活躍で、紙面を賑わせた。

他、ラグビーが今回調べた年数の中で一番多く取り上げられていた。内訳は大学ラグビーが 4 個、社会人ラグビーが 3 個である。大学は、年始の大学日本選手権で早稲田大学が決勝進出を決めた事（1/3）、秋の対抗戦で日本体育大学に勝利した事（11/5）、同じく秋の対抗戦で、明治大学が慶応義塾大学に勝利した事（11/12）、そして、伝統の早明戦で早稲田大学が同点優勝を飾った事（12/3）の 4 個が書かれていた。一方社会人は全部神戸製鋼に関するもので、社会人ラグビー大会で優勝した時（1/9）、日本選手権優勝（1/16）、そして翌シーズンの勝利を伝える記事（12/31）の 3 個であった。

最後に、やり投げ、皇室・王室、F1 の 3 つが本調査においては初めて登場した。まず 2 個見る事ができた F1 は、鈴木亜久里に関する見出しであった。日本グランプリで日本人初となる表彰台に上がったこと（10/22）、そして自身がベネトンというチームに移籍が濃厚になったことを伝えるもの（10/31）であった。やり投げは、溝口和洋が 82 メートル 06 という記録で優勝したこと（9/16）、

皇室・王室関連は天皇陛下の即位宣言の様子を伝えたもの（11/13）であった。

この年の大見出しは、80年と比べて野球に関する見出しがかなり減少した。その一方でゴルフやラグビー、ボクシングといった他のスポーツを扱う量が増え、いわゆる「野球専門紙」から「スポーツ総合娯楽紙」へと変化を遂げようとする姿勢を見て取ることができた。

3-5-1-2. 大見出し以外の見出し

次に中見出しであるが、扱っているスポーツ種は大見出しから1種目へった除いた18種目であった。この1種目減ったのはアメリカンフットボールで、「日大 No.1」（1/4）であった。これは、中見出しに該当する大きさの見出しが無かったためであった。その日、この記事に関する小見出しは8個あった。

中見出しの種別数は、野球（276個）、ボクシング（25個）、競馬（各23個）、芸能、相撲（各17個）、ゴルフ（15個）と続いた。芸能関連の見出しが増加し、相撲とゴルフが減った。芸能関連の見出しは、一つの大見出しで2個の中見出しが使われる事が2回あり（12/29、12/30）、インパクトの大きい出来事が起こったことが読み取れる。

小見出しに関しては、1980年に比べて400個近く増加したが、スポーツ種目数に関しては1種目増加したに過ぎなかった。しかしこの年の大見出しからは新たに8種目加わった。小見出しになって増えたスポーツは、スピードスケート（3個）、テニス、バスケットボール（各2個）、ラリー、フィギュアスケート、五輪、アジア大会、バレーボール（各1個）の8種目であった。

スピードスケートは、全ての記事が橋本聖子に関するものであった（聖子全日本選手権制覇、2/6、アジア冬季競技大会の宣誓は聖子、3/8、聖子金獲得、3/13）。

テニスは、共に海外選手に関するものであった（S・グラフが東レ・パンパシ優勝、2/5、ウィンブルドンでベッカーが決勝進出、7/8）。当時日本人選手では松岡修造が世界でも活躍していたが、前年に怪我をしてしまい1990年は紙面ににぎわす活躍を見せることはなかった。

バスケットボールは、共に女子バスケット日本代表チームに関する見出しがついていた（女子バスケットアジア選手権決定、1/7、女子バスケット世界選手権出場権獲得、3/3）。

フィギュアスケートは、伊藤みどりが頭角を現してきて、世界選手権で2位になった記事であった（みどり世界選手権2位、3/12）。

そして、1990年に初めて登場したラリーは、篠塚健次郎がパリ・ダカールラリーに初出場するという記事であった。ちなみにラリーの記事は後にも先にもこの記事だけであった。

1951年以来40年ぶりの登場はアジア大会に関するものであった（「旗手決定」6/14）。

女性に関する見出しが見られ始めたが、この小見出しであげられている橋本聖子と伊藤みどりはともに「聖子」、「みどり」と下の名前で表記されており、この点は現代の表記の仕方と変わりがないことがわかった。

小見出しの種別数は、野球（3121個）、相撲（243個）、競馬（241個）、ゴルフ（240個）、芸能（221個）、ボクシング（211個）で、中見出しとはだいぶ異なる結果となったここで増加した相撲や競馬は、力士や騎手へのインタビュー、そして番記者の取材後記のような細かい情報が多く目についた。

続いて写真は595枚であった。写真に関しては、大見出しと同じスポーツ種目のものが扱われていた。1980年に比べると、多少の増加を見せた。種別数を見ても、野球（383枚）、競馬（32枚）、相撲（31枚）、ボクシング、芸能（各

28 枚) であった。ボクシングは大見出しこそ多かったが、それ以降の中・小見出し、写真は減少の途をたどった。しかし、ボクシングを記事にしたときは、大きな写真一枚だけ、というパターンが目立った。一枚で読者に伝わるようなインパクトを与えていた。

最後に図表であるが、1980 年のから僅少の 403 枚であった。図表に関してはこの年ならではの傾向を見つけることはできなかった。

女性の記事に関しては、総数が 171 個で、大見出しでは 9 回扱われた。特に「芸能」で半数近い 4 回扱われた。

スポーツ選手の人物別に見ると個人ではゴルフの樋口久子、岡本綾子、マラソンの兵頭勝代で、団体は女子バスケットボール日本代表が 1 回ずつ登場した。

1980 年に比べるとかなり数が増加したが、全見出し数の 2% とわずかしかな女性の記事は扱われなかった。

以上が 1990 年の日刊スポーツに関する調査結果である。

3-5-2. 東京スポーツ

続いて、東京スポーツについて見ていきたい。1990 年は 10 枚 90 円で発行され、1980 年と同じく毎週日曜日が休刊日により 307 日の発行となった。

見出しの総数は 5648 個で、一日に約 18.3 個見出しが載せられており、1980 年と比較すると約 5 個増加した。大見出しは 307 個、中見出しは 449 個、小見出しは 3923 個、写真は 906 枚、図表は 63 個であった。また、扱っているスポーツ種は大・中・小見出し・写真の順に 14、12、21、15 種目と、見出しの総数も、扱う種目数も増加した。特に小見出し、写真にその傾向を見ることができる。

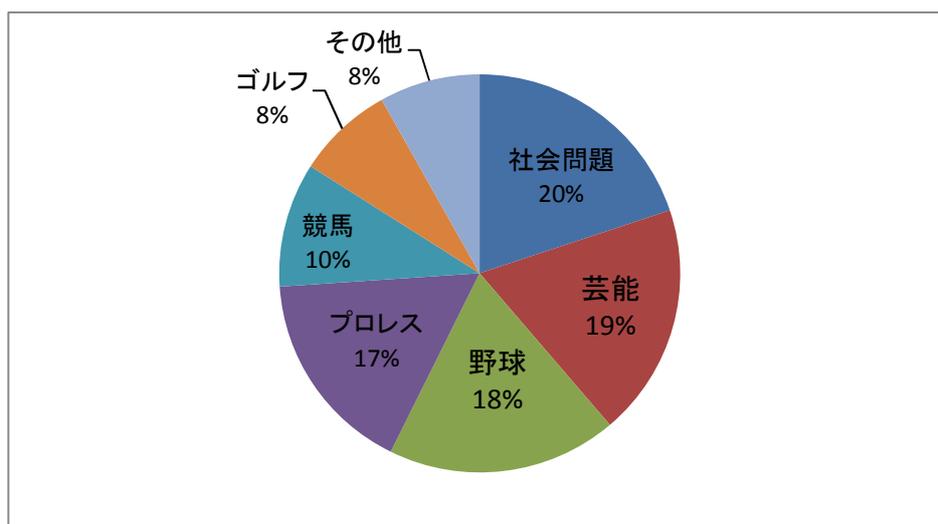
3-5-2-1. 大見出し

大見出しは、この年も一日に1個の割合で見ることができた。扱った種類は14種類で、詳細は以下の表14、図9の通りである。また、見出しは固有名詞のみの表象が大半だった。

表 14. 1990 年の東京スポーツの大見出しにおけるスポーツ種と個数

個数	スポーツ種	個数	スポーツ種
61	社会問題	6	サッカー
58	芸能	4	ボクシング
57	野球		UMA
51	プロレス	1	相撲
31	競馬		柔道
24	ゴルフ		体操
8	皇室・王室		宇宙

図 9. 1990 年の東京スポーツにおける大見出しスポーツ種別割合



野球であるが、内訳はプロ野球（54 個）のうち巨人（10 個）、セ・リーグ（7 個）、パ・リーグ（18 個）、その他（19 個）でアマ野球（3 個）は高校野球であ

った。

1990 年は野球に関する記事が 1980 年と比べてかなり減少した。特に巨人に関する記事は顕著である。パ・リーグよりも少なかった。巨人というチーム全体については、2 個だけでともにシーズン後の出来事であった（「広岡氏「巨人敗因は金と麻雀」 10/26）。一方個人でも、桑田真澄に関する記事が 7 個とほぼ全てであった。特にシーズン前から登板日漏洩疑惑のかかっていた事もあり、それに関わる内容の記事で終始した（「桑田出廷」 4/10、「桑田謹慎一年に増刑」 4/13）。

巨人より多かったパ・リーグは、チームでは西武ライオンズ、個人では野茂英雄、落合博満が紙面に登場。西武は、高校球児を練習に参加させ（8/31）、ドラフト指名での密約が見つかった（11/14）など球界を揺るがす事件を起こしたことで紙面に取り上げられた。野茂はシーズンの活躍もあり 6 個、落合は「三冠王を取ったら引退！？」など 3 個見る事ができた。

その他は、前年のドラフト会議でダイエーからドラフト 1 位指名されながらも拒否し、ハワイへ野球留学した元木大介に関する記事が半数以上の 13 個を占めた。

1970 年に圧倒的個数を誇っていたプロレスは、1980 年に比べればかなりの増加をみせた。中でも、この年の 2 月にプロレスデビューした北尾光司に関する見出しが 16 個と多かった。次いで、所属していた全日本プロレスから離脱し、SWS という団体を旗揚げした天龍源一郎が 9 個だった。この新団体旗揚げについて多くの見出しを見る事ができた（「天龍惨敗」 10/20、「大量解雇」 10/21）。

ゴルフでは、女子ゴルファーが半数を占めた。中でも岡本綾子と小林浩美が計 12 個（岡本 7 個、小林 5 個）登場した（「綾子優勝」 5/8、「浩美 V 圏」 2/3 など）。

また、この年本調査において初めて大見出しで登場したサッカーは、すべてワールドカップイタリア大会での出来事を報じたものであった（「アルゼンチン激勝」 7/5、「西独優勝」 7/10 など）。

芸能記事に関しては、年初にハワイ・ホノルル空港において、マリファナ所持容疑で逮捕された勝新太郎が紙面を賑わせた。勝の妻である中村玉緒も数回登場した（勝に関しては、すべて「勝新」と表記される。「勝新ハワイで逮捕」 1/18、「勝新台湾へ逃亡計画」 1/13、「玉緒」 6/13）。勝のほかにも、中森明菜が報道された。しかし内容はすべてマイナスなものであった（「明菜薬漬け」 3/30、「明菜酒乱」 12/13 など）。

そしてこの時代に一番多く見ることができたのは、社会問題に関するものであった。

特別際立った事象はなく、いくつかの事象が積もってこの数になったといえる。例えば、コロンビアの犯罪組織指導者の「麻薬王」ことパブロ・エスコバルに関して 5 個（「麻薬王のエイズ本」 1/16 など）、創価学会の池田大作会長に関する記事が 4 個（「池田名誉会長追放へ」 3/6 など）である。また、現役引退後政界に進出したアントニオ猪木が世界平和のために世界を飛び回っている様子を描いた記事も 6 個あった（「猪木の爪のアカ」 12/8 など）。

最後に、本調査を進めていく中で始めて UMA（未確認動物）系の記事が登場したことも述べたい。6/12 に「人面魚が笑った」で登場し、5 日後には人面魚に便乗した産業の登場を書いている。そして 12/29 には「人面魚」が中性脂肪過多症であったことを明らかにし、すでに完治したことを報告した。

1990 年の大見出しは、以前までの野球、プロレス、競馬といった種類の他に、芸能、社会問題が登場した。これは、現在の東京スポーツに 1 歩近づいたといっても過言ではないだろう。現在の東京スポーツとは、2010 年の傾向を見ても

わかるがスポーツよりも芸能、社会問題の方が多く掲載されている「総合娯楽紙」のような状態の事をさす。また同じく人面魚、宇宙（「秋山飛行士朝立ちした」 12/14）といったものが見えたのもこの時代からであった。

3-5-2-2. 大見出し以外の見出し

続いて中見出しに関してみてみたい。総数は 449 個で扱った種類は大見出しよりも 2 つ除かれた 12 種類であった。これは、相撲と宇宙関連の見出しである。中見出し自体の総数も 1980 年と比べて減少した。

中見出しのスポーツ種別の主な数は、社会問題（93 個）、野球（91 個）、芸能（88 個）、プロレス（77 個）、競馬（38 個）、ゴルフ（33 個）と続いた。野球が芸能記事を抜いた。中見出しで、韓国野球に関する見出し（「韓国プロ野球の氷風呂特訓を見よ」 1/25）が登場するなど、数字を伸ばした。

次に小見出しについてみたいと思う。小見出しは 3923 個で扱われた種類は 21 種類だった。大見出しから加わったものとして、テニス（13 個）、F1（4 個）、アメフト（2 個）、ラグビー（2 個）レスリング（1 個）、陸上（1 個）、やり投げ（1 個）であった。

まずテニスであるが、6 月に毎年行われているウィンブルドンに関する記事が 3 個であった。そのうち一つは、「女王」ことシュテフィ・グラフが準決勝で敗退した記事（6/23）、松岡修造が敗退した事を伝える記事（6/24）、ボリス・ベッカーが決勝進出するも準優勝に終わった事を報じるものであった（6/27）。また他の 10 個に関しても、ベッカーがモナコ女王と裸の密会をしていた事に関する記事であった（8/8）。

F1 に関しては、その年の F1 世界選手権の結果が主に報じられていた。シーズン開幕戦のアメリカグランプリでは、アイルトン・セナが優勝（3/13）、メキ

シヨグランプリでは鈴木亜久里が 6 位入賞 (6/26)、そして日本グランプリで 3 位となり日本人初の表彰台に上がった事が報じられた (10/23)。

ラグビーは、関東大学ラグビー対抗戦における伝統の一戦、早明戦において早稲田大学の今泉清が終了間際 12 点差から同点に導く奇跡的なトライを挙げた記事が 2 個あった (12/4)。

やり投げは、高校での部活中に学生が投げたやりが歩行中の生徒に誤爆してしまったという事故が報じられた (9/26)。

他の小見出しの数割合は、野球 (799 個)、社会問題 (708 個)、芸能 (705 個)、プロレス (583 個)、競馬 (459 個) であった。野球の見出しがついには一番多くなった。しかし細かく見てみるとパ・リーグに関する記事が一番多く (221 個)、細かな記事が多かった事がわかる。

写真に関しては、906 枚でスポーツ種は 15 種類であった。大見出しと異なるのは、F1 が増えた事である。

この F1 は、上記した鈴木亜久里が地元開催となった日本グランプリで 3 位になった時の写真である。

写真では、1980 年と同様野球に関する写真が 799 枚とかなり多く掲載されていた。ここでもパ・リーグの写真が最も多く 221 枚であった。ちなみに社会問題に関する写真は 168 枚で、大見出しで扱われた数が多くても、写真が多いとは限らないこと、そしてスポーツに関する写真が多く撮られている事がわかった。

最後は図表である。図表は 63 枚で、競馬が 24 枚と多かった。

1980 年同様、競馬は各見出しで用いられており、その時注目された馬の全成績、騎手の成績が表として掲載されていた。

他皇室・王室関連で 1 枚使用された。これは、天皇の即位の礼において 123

億円も使われたことを報じる記事の中で、使用したお金の内訳について図表で表わされていた（11/13）。

以上が 1990 年の東京スポーツについての調査結果である。

3-6. 2000 年

2000 年に起きた出来事について簡単に触れたい。スポーツではこの年、オーストラリアのシドニーで夏季五輪が開催された。日本はマラソンの高橋尚子を含む金 5 個を獲得した。相撲界では 3 月に貴闘力が幕じり最年長優勝を遂げると、5 月場所では魁皇が初優勝。その後大関に昇進した。プロ野球は、日本シリーズが読売ジャイアンツと福岡ダイエーホークスの「ON 決戦」で話題を呼び、読売ジャイアンツの 4 勝 2 敗で幕を閉じた。

社会現象としては、サザンオールスターズの TSUNAMI が発売され、CD 歴代シングルの売上最高記録を樹立した。その他の社会問題としては営団日比谷線脱線衝突事故、小渕恵三元首相の死去、世田谷一家殺害事件など悲しみを誘う事件、出来事が多発した年でもあった。

では、各見出しの検証を行っていききたい。

3-6-1. 日刊スポーツ

2000 年度の日刊スポーツは、40 枚刷りの 120 円で販売され、365 日毎日発行された。両面 1 面の日が 21 日あり、内訳はプロ野球が 6 日、J リーグが 3 日、海外サッカーが 2 日で代表サッカーが 10 日であった。

見出しの総数は 5820 個で、それぞれの見出しの内訳は、大見出しが 365 個、中見出しが 420 個、小見出しが 3721 個、写真が 696 枚、図表が 617 個であった。また、扱っているスポーツ種は大・中・小見出し・写真の順に 23、23、27、

23 種類とほぼ同数のスポーツを各見出しで扱っていることがわかった。

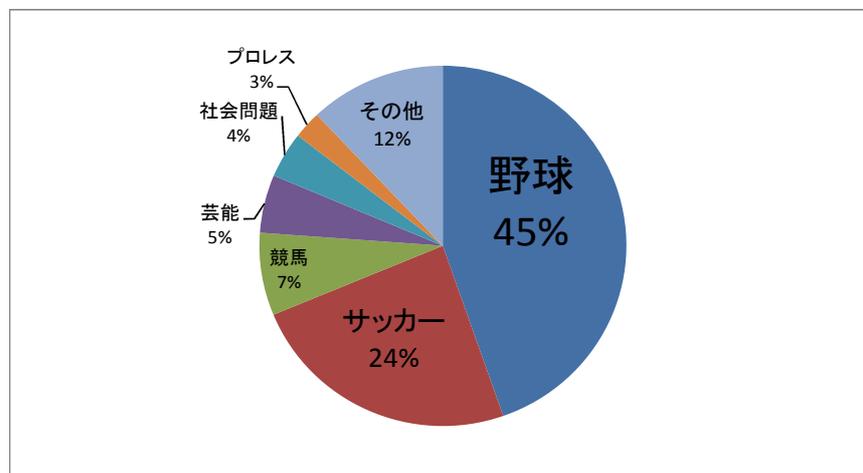
3-6-1-1. 大見出し

まず大見出しだが、扱われていたスポーツ種は 23 種類で詳しくは以下の表 15 と図 10 を見てほしい。このうち、柔道、マラソン、ソフトボール、水泳、五輪、バレーボール、シンクロナイズドスイミングはシドニー五輪関連の見出しであった。また、表記の仕方は固有名詞のみの見出しがほとんどであった。

表 15. 2000 年の日刊スポーツの大見出しにおけるスポーツ種と個数

個数	スポーツ種	個数	スポーツ種
163	野球	2	ラグビー
88	サッカー		五輪
27	競馬	1	ボクシング
19	芸能		バレーボール
15	社会問題		シンクロナイズドスイミング
11	相撲		駅伝
9	プロレス		皇室・王室
5	柔道		競輪
4	マラソン		F1
3	ソフトボール		K-1
	ゴルフ		
	水泳		
	PRIDE		

図 10. 2000 年の日刊スポーツにおける大見出しスポーツ種別割合



まずは、野球についてみていきたい。野球の内訳は、プロ野球（152 個）、うち巨人（98 個）、セ・リーグ（6 個）、パ・リーグ（32 個）、その他（16 個）で、アマ野球（2 個）は高校野球、メジャーリーグ（9 個）であった。やはり巨人に関する記事が最も多く見る事ができた。しかしその中での細かい内訳は、巨人というチームに関しては7 個と少なさを見せた。一方で個人選手に関しては、長嶋茂雄監督の記事が多かった。この年から背番号を「3」に戻した事、日本一に導いた事で19 個登場（「長嶋14点 脱出」4/24、「長嶋さんバンザイ」9/25 など）。次いで清原和博に関して12 個（「清原コケにした」1/12、「清原無敵」8/2 など）、高橋由伸が9 個（「高橋三冠打法」2/27、「高橋140メートル」4/26 など）、以下上原浩治の7 個、松井秀喜の6 個と続いた。

次に多かったのがサッカーに関する記事で、88 個あった。特に日本代表（43 個）、海外サッカー（34 個）に関する記事が多く見る事ができた。日本代表は、シドニー五輪での活躍、またそこに至るまでの過程が多く報じられていた（「小野変身」8/17）、「トルシエ絶対勝つ」9/14 など）。海外サッカーに関しては、中田英寿がペルーからローマに移籍し、また城彰二がエスパニョールに移籍したことが大きな要因だったと考えられる。中田に関する記事（日本代表は除く）は18 個（「中田ローマ」1/13、「中田明日先発」1/15 など）、城に関する記事は10 個（「城「自信ある」」1/7、「城2発」2/28 など）、他名波浩の移籍（「名波移籍」3/7）などが報じられた。

五輪関連の記事としては、女性を扱うものが多かった。詳しくは後で述べる。女性アスリート以外では、柔道が多かった。滝本誠、井上康生の金メダル獲得、そして「世紀の大誤審」として今でも語り継がれている篠原信一の銀メダル獲得記事（「誤審」9/23）が報じられた。

その他目立ったこととして、ボクシングの減少が見られた。1990 年は16 個

あったボクシング関連の記事であるが、2000年には1個しか報じられなかった。これは徳山昌守が失神しながらも自身の王座を防衛したことを報じたものであった(12/13)

全体的に野球に関する記事が少なくなったという印象を受けた。巨人の独壇場で、またヒーローが不在だったセ・リーグはともかく、福岡ダイエーホークスの強力打線、また西武ライオンズの松坂大輔などがいたパ・リーグに関する見出しが少なかったのは意外であった。やはりシドニー五輪で各競技での日本人選手の活躍があったこと、また社会問題に関する記事(小淵総理死去など)が増加した事が大きな要因だと考えられる。

3-6-1-2. 大見出し以外の見出し

次に中見出しであるが、扱っているスポーツ種は大見出しと同じで23種類であった。また、見出しの量自体も大見出しとの相違は見られず、特に注目する点は見つからなかった。

小見出しに関しては、1990年に比べて1000個近くの減少を見せた。これは後述する写真の増加にも関係していると推測されるが、少しの情報が写真や図表でカバーされるようになったのではないかと考えられる。

小見出しになって加わったスポーツは、レスリング(永田克彦銀メダル獲得、9/28)、テニス(杉山愛ウィンブルドンで1勝、7/7)、アジア大会(2002年アジア大会の開催地が釜山に決定、3/1)、体操(ラドゥカン金剥奪、9/26)の4種目であった。

小見出しの各種別の内訳は、野球(1625個)、サッカー(881個)、競馬(314個)、芸能(184個)、社会問題(180個)、相撲(116個)と続いた。

写真は696枚であった。写真に関しても、大見出しと同じスポーツ種のもの

が扱われていた。内訳は野球（317枚）、サッカー（152枚）、競馬（38枚）、芸能（30枚）、社会問題（28枚）であった。しかし、1990年に比べると、細かい写真、連続写真が増え、小見出しの量の減少に影響を及ぼしたといえる。

最後に図表であるが、1990年の約1.5倍となる617枚も記されていた。文字だけではなく、図表でランキングやゴールへの経緯を示すことで読者によりわかりやすく伝えようとしている事がわかる。

2000年全体の特徴として、社会問題に関する記事が多く扱われるようになった。上述した営団日比谷線脱線衝突事故、小渕元首相の危篤という2つの事件以外にも、新潟少女監禁事件（1月30日）、オウム真理教松本教祖の長女逮捕（2月20日）、17歳少年バス乗っ取り事件で、人質を刺殺（5月4日）などの記事が扱われていた。世田谷一家殺害事件に関しては、一面では取り上げておらず、同日の記事は「サザンレコード大賞に今日決定」というものであった。このように、1990年は6個だったのに対し、2000年は15個と2倍以上の数字を表している点から、三浦が述べているように「スポーツ専門紙」から「総合娯楽紙」への変身が見て取ることができる。

女性の記事に関しては、総数が352個で、大見出しでは24回扱われた。特に「芸能」で半数近い10回扱われた。

大見出しで取り上げられたものに関して人物別に見ると、シドニー五輪で金メダルを獲得した高橋尚子が4回登場し、総数では47個数えることができた。その他スポーツ選手（個人）では、千葉すず（11個）、田村亮子（11個）がそれぞれ2回、中村真衣（18個）と田中雅美（18個）、山本美憂（18個）がそれぞれ1回であった。団体ではそれぞれシドニー五輪で銀メダルを獲得した女子ソフトボール日本代表が2回で30個、女子シンクロナイズドスイミング日本代表が1回で21個、そして初めて五輪の出場権を逃した女子バレー日本代表が

20 個であった。その他は芸能人が占めていた。

過去に比べるとかなり女子を扱う記事が増加したことが分かる。

3-6-2. 2000 年の東京スポーツ

続いて、東京スポーツについて見ていきたい。2000 年は 40 枚 120 円で販売され、308 日発行された。

見出しの総数は 4545 個で、一日に約 14.8 個見出しが載せられており、1990 年と比較すると約 4 個減少した。大見出しは 308 個、中見出しは 428 個、小見出しは 3145 個、写真は 542 枚、図表は 122 個であった。また、扱っているスポーツ種は大・中・小見出し・写真の順に 16、13、20、16 種目と、見出しの総数は減少したが、扱う種目数は増加した。

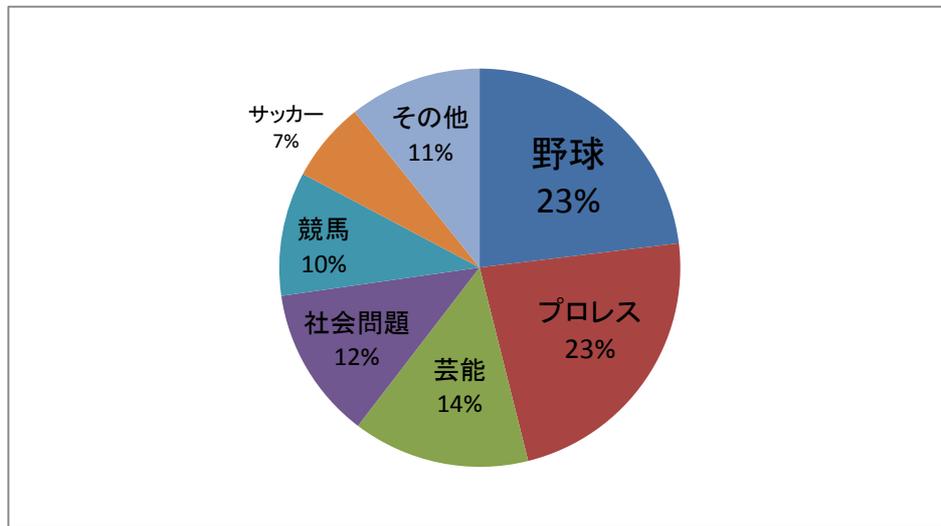
3-6-2-1. 大見出し

大見出しはこの年も一日に約 1 個の割合で見ることができた。扱った種類は 16 種類で、詳しくは下記の表 16、図 11 を参照してほしい。また、見出しの表記に関しては 1990 年と同じく固有名詞のみの表象が大半だった。

表 16. 2000 年の東京スポーツの大見出しにおけるスポーツ種と個数

個数	スポーツ種	個数	スポーツ種
71	野球	3	PRIDE
	プロレス	2	マラソン
44	芸能	1	ソフトボール
38	社会問題		体操
31	競馬		レスリング
20	サッカー		K-1
17	相撲		柔道
6	ゴルフ		五輪

図 11. 2000 年の東京スポーツにおける大見出しスポーツ種別割合



まず野球であるが、内訳はプロ野球（66 個）のうち巨人（43 個）、セ・リーグ（13 個）、パ・リーグ（5 個）、その他（5 個）でアマ野球（2 個）は高校野球、そしてメジャーリーグが 3 個であった。

2000 年は野球に関する記事が 1990 年と比べて増加した。中でも巨人に関する記事は 1980 年と同じとはいかないかでも増加を見せた。巨人というチーム全体については、1 個だけで、これはシーズン後の出来事であった（巨人、内海を来年獲得 11/19）。一方個人では、松井秀喜に関する見出しが 14 個と一番多かった。これはプレーに関するものは少なく、「松井泣く」（2/18）では、キャンプ中に長嶋監督のノックを受けたら感慨深くなって泣く、と語った（写真 13）事や、「熊」（8/5）では知人から熊をもらったことを知らせる記事であった。試合に関する記事は 0 個だった。

この年初めて大見出しに出現したメジャーは、前年オフにシアトルマリナーズに移籍した佐々木主浩に関するものであった。新人最多セーブを挙げて、チームのプレーオフ進出を決めた時（「審」 10/3）、5 連続奪三振でチームの 2 連

勝を導いた時（「S」 10/6）、メジャーリーグの新人王を獲得した時（「新人王」 11/8）の3個であった。

野球と同数だったプロレスは、2つの大きな出来事を中心に大見出しは構成された。1つ目は橋本真也と小川直也の長きにわたる抗争関連である。橋本に関しては復帰～引退～復帰を繰り返し12個見出しとして取り上げられ、小川については10個取り上げられた。2つ目は全日本プロレスの社長（当時）の三沢光晴が大量26人の選手・スタッフを率いて新団体「プロレスリング・ノア」を設立した事である。この大量離脱騒動自体の記事が7個あり、個人では三沢が13個、小橋健太が3個、秋山準が1個、大見出しで報じられた。1990年のSWS旗揚げ（天龍源一郎による）と似ているが、その時よりも大きく報道されている。

また、この年初めてPRIDEとK-1について報じられた。PRIDEは桜庭和志が「PRIDE GP 2000」に出場してホイス・グレイシーに勝利した事（5/3）、次の相手を猪木に指名されたこと（8/29）、そしてプロレス大賞でMVPに輝いた事（12/20）の3個あった。K-1は、アンディ・フグの死去という訃報記事1個であった（8/26）。

相撲も、かなり増加した。しかし内容は全てスキャンダル問題であり、取組に関するものは一つもなかった。水戸泉（現・錦戸親方）の婚約破棄問題（8個）と、二子山部屋の女将（当時）憲子さんの不倫問題が主であった。後者には元横綱・三代目若乃花も絡んでおり、かなり大見出しで登場した（9個）。

ゴルフでは、タイガー・ウッズが全英オープンで独走の11アンダーで制し、史上最年少でグランドスラムを達成（7/25）、また全米オープンゴルフ選手権では新記録の18アンダーで優勝し、3連続メジャー優勝という快挙を成し遂げたことを伝えた（8/22）。

柔道、体操、マラソンというのは、全てシドニー五輪、それに付随する見出しであった。柔道は、48キロ級代表の田村（現・谷）亮子の試合前に小川直也がアドバイスを送った見出し（「田村 STO だ」 9/17）、体操はルーマニアの体操女王ラドゥカンがドーピングで金メダルをはく奪された事（「金」 9/27）だった。そしてマラソンは金メダルを獲得し、国民栄誉賞候補に挙げられた高橋尚子について（「辞退」 10/13 ※結局受賞）と、高橋のコーチ・小出義雄が国民栄誉賞の授賞式で、獲得賞金を借金返済に使うと豪語した時の記事（「借金返済」 12/17）であった。

芸能記事に関しては、半分が女性芸能人を扱った。特に多かったのは宇多田ヒカルで5個（「不適切」 1/20、「光」 8/27 など）で、次いで倉木麻衣が3個、松田聖子、広末涼子が2個ずつであった。

2000年の大見出しは、より一層現在に近づいたといえる。野球、プロレス、競馬、芸能、社会問題に関する記事がバランスよく掲載されていた。しかし、UMA関連の記事が一つも見られなかった。

3-6-2-2. 大見出し以外の見出し

続いて中見出しに関してみてみたい。総数は428個で扱った種類は大見出しから3つ除かれた13種類であった。この3つは、マラソン、体操、五輪であった。中見出し自体の総数は1990年と比べて減少したが、扱われた種類は1種類増加した。

中見出しのスポーツ種別の主な数は、プロレス（103個）、野球（94個）、芸能（66個）、競馬（62個）、社会問題（40個）と続いた。大見出しではプロレスと野球の見出し数は同数であったが、中見出しではプロレスの方が上回った。

またここで、サッカーのJリーグに関する記事が本調査では初めて現れた。

大見出しでは、当時から海外でプレーしていた中田をはじめ、城彰二に関する見出しが多かったが、中田英寿（当時ローマ）が日本に帰国し、ヴェルディ川崎（現・東京ヴェルディ）でプレーをするといった憶測記事の中の1つとしてJリーグに関する記事が登場した（11/17）。

次に小見出しについてみたいと思う。小見出しは 3145 個で扱われた種類は 20 種類だった。大見出しから加わったものとして、水泳（3 個）、ハンマー投げ、テニス、皇室・王室が各 1 個ずつであった。水泳とハンマー投げはシドニー五輪に関連した見出しであった。

まず水泳についてである。千葉すずがスポーツ仲裁裁判所に、代表選考漏れに関して提訴したが敗訴となったことを伝えた事（8/5）が1つ。他2つはシドニー五輪女子 100 メートル自由形で日本初の決勝、田中雅美が同じく女子 200 メートル平泳ぎで決勝新進出を報じる見出しであった（9/20）。

ハンマー投げは、室伏広治が決勝で 6 位入賞だったことを告げるものであった（9/24）。

テニスは、杉山愛がジュリー・アラール＝デギュジスとのペアで、全米オープンダブルスを制し、日本人では 25 年ぶりの快挙を成し遂げた事を報じた（9/12）

皇室・王室に関しては、皇太后良子妃が歴代皇太后の中で最高齢の 97 歳で逝去された事を知らせる見出しであった（6/18）。

他の小見出しの数割合は、プロレス（662 個）、野球（651 個）、芸能（485 個）、競馬（415 個）、社会問題（335 個）、相撲（101 個）であった。ここでは芸能に関する記事が増加した。これは、大見出しこそ他の種に譲ったが、内容では芸能に関する割合が多い事がわかる。特に、女性芸能人に関する記事がやはり多く見られた。先ほど大見出しで挙げた 3 人以外で他 32 人が名を連ねた。

写真に関しては、542枚でスポーツ種は16種類であった。大見出しと同じ種類が扱われていた。写真の枚数が激減したが、扱う種類は1990年と比較して増加した。

数割合は、野球に関する写真が118枚で、中でも巨人が79枚を占めた。しかしそれ以上の枚数をプロレスは数えた(130枚)。やはり大見出しの数と写真の枚数の多さは比例している事がこの年では証明された。

最後は図表である。図表は122枚で、この年も競馬が多く見られたが98枚とかなりの多さを見せた。1980年同様、競馬は各見出しで用いられており、その時注目された馬の全成績、騎手の成績が表として掲載されていた。

他には、ゴルフで図表を見ることができた。コースのスコアの推移や過去成績が載せられていた(ウッズ、4冠の軌跡 8/22など)。

以上が2000年の東京スポーツについての調査結果である。

3-7. 2010年

3-7-1. 日刊スポーツ

2010年度の日刊スポーツは、40枚刷りの130円で販売され、352日発行された。両面1面の日は8日あり、内訳は日本代表が3日、メジャーリーグが2日、プロ野球、ゴルフ、競輪が1日であった。

見出しの総数は4848個で、それぞれの見出しの内訳は、大見出しが354個、中見出しが395個、小見出しが2910個、写真が645枚、図表が544個であった。また、扱っているスポーツ種は全て21種類であった。大見出しで扱われた出来事のみしか一面では扱われていなかった。

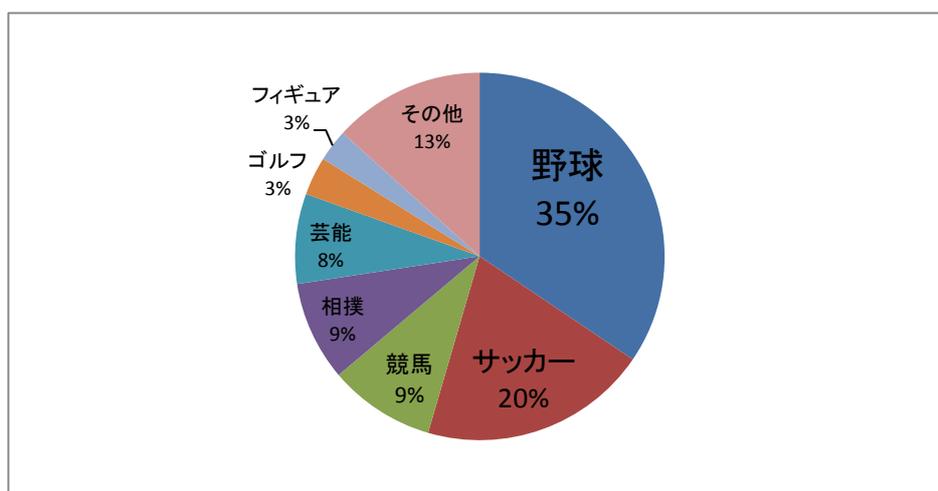
3-7-1-1. 大見出し

まず大見出しだが、扱われていた種類は 21 種類で、次頁の表 17、図 12 を見てほしい。

表 17. 2010 年の日刊スポーツの大見出しにおけるスポーツ種と個数

個数	スポーツ種	個数	スポーツ種
120	野球	2	カーリング
71	サッカー		モーグル
33	競馬		スピードスケート
31	相撲	1	テニス
27	芸能		ラグビー
12	ゴルフ		駅伝
11	フィギュアスケート		スノーボード
8	ボクシング		柔道
5	総合格闘技		競輪
4	社会問題		競艇
			皇室・王室

図 12. 2010 年の日刊スポーツにおける大見出しスポーツ種別割合



このうち、カーリング、モーグル、スピードスケート、スノーボードはバンクーバー五輪関連の見出しであった。

このように、野球に関する見出しがやはり多く見られた。しかしその内訳は例年とは異なっていた。内訳は、プロ野球（92個）、うち巨人（16個）、セ・リーグ（31個）、パ・リーグ（42個）、その他（3個）で、アマ野球（11個）は高校野球（4個）、大学野球（7個）、そしてメジャーリーグ（18個）であった。この数字を見て分かる通り、巨人に関する記事は極端に減少し、セ・パ両リーグ、そしてメジャーリーグに関する見出しが増加した。

パ・リーグに関しては、キャンプ中、2008年のドラフト会議で話題となった雄星（埼玉西武ライオンズ）に関する見出しが4個見られた。シーズン突入後は、まるで混戦をしめしたシーズン同様、各チームの日替わりヒーローが見出しに登場（「浅村1号」8/11、「中村1勝」8/12など）し、最終的には日本一に輝いた千葉ロッテマリーンズに関する見出しが多く占めることとなった。特に、パ・リーグチャンピオンに輝いた時は両一面で報じられた（「Miracle」10/20）。

セ・リーグは、特に阪神タイガースに関するものが多く見られた。シーズン終盤まで優勝争いを展開したこと、また金本知憲が5月に連続フルイニング出場記録が途切れたことが大きく影響し、20個あった。タイガース関連では「虎」という言葉が多く使われていた（「虎 1.5差」7/10、「虎、サヨナラ弾」7/21など9個）。金本関連では、愛称である「アニキ」という言葉で表象されていた（「アニキが止めた」4/19）。なお、優勝した中日ドラゴンズについては4個にとどまった。

メジャーリーグは、松井秀喜が14個、イチローが3個、高橋尚成が1個であった。その中で、松井が開幕戦で本塁打を放った時（「松井開幕弾」4/7）、イチローが10年連続200本安打を放った時（「イチロー殿堂確」9/25）の2回は両一面を飾った。

次に多かったのがサッカーに関する記事で、71 個あった。内訳は日本代表 (55 個)、海外サッカー (12 個)、Jリーグ (4 個) で、日本代表に関する記事が多く見ることができた。これは、6 月に FIFA ワールドカップが行われた事が大きな要因だろう。ワールドカップ周辺 (6/12~7/1) においては、6/22 を除いて毎日日本代表関連の見出しが飾られていた。また、日本代表が試合を行った翌日はパラグアイ戦を除いて 3 試合が両一面で扱っていた (「本田」 6/16、「岡ちゃん、本田「悔しい」」 6/20、「本田」 6/26)。日本代表に関しては、ワールドカップ後も後任監督問題で紙面を賑わせた。8/3 の記事では 3 人の後任監督候補を一面に持ってきていた (「ファンバステン氏」、「フェルナンデス氏」、「バルベルテ氏」)。

相撲に関しては、朝青龍、貴乃花親方関連の事、そして野球賭博という 3 つがメインで一面を飾った。なお、年 6 度行われた場所の取組に関する見出しは一つも見られなかった。朝青龍については、初場所優勝した見出しは一つもなく、暴行事件から引退までの事を中心に 12 個取り上げられた (「朝青 終わり」 1/30、「朝青クビ」 2/5 など)。貴乃花親方に関しては 7 個 (「貴親方 理事選出馬 反乱」 1/9、「貴当選」 2/2 など)。野球賭博では、琴光喜の賭博関与問題から始まり (「琴光喜 賭博聴取」 5/22)、名古屋場所のテレビ放送中止 (「相撲中継 中止」 7/8) まで至った。そしてワールドカップ期間中もこの野球賭博に関する話題のみが割って報道されていた (「相撲協会 崩壊」 6/22)。それだけ重大な話題だったことがうかがい知れる。

フィギュアスケートは、バンクーバー五輪銀メダリストの浅田真央が 8 個、同じく銅メダルの高橋大輔が 2 個であった。浅田に関しては、年末の全日本選手権での復活劇も取り上げられていた (12/27、28)。

最後にこの年初めて本調査で現れた競艇について述べたい。競艇は、12 月に

行われた賞金王決定戦の予想記事であった。競馬同様馬柱が建てられて、評論家が予想を立てていた。中でも出場選手を、その年活躍した他のスポーツ選手に例えている箇所があり、初心者でも予想をしやすくさせる工夫を見ることができた（これは、競輪グランプリ、有馬記念時も同様）。

大見出しに関してはこのような結果となった。ワールドカップが行われ、戦前の予想を覆す健闘ぶりから見出しの数が増加した。一方でプロ野球においては、巨人以外のチームに人気選手が増えた事（特にパ・リーグ）で扱う見出しがかなり変化した。

また、表象の言葉としては、女性アスリートを扱う際は過去と変わらず愛称で用いられていた（後述）。しかし、これは男性に関してもいえた。プロ野球で「アニキ」（金本）、「マー君」（楽天・田中将大）、「おかわり」（西武・中村剛也）といった愛称で呼ばれる見出しも見ることができた。

以上が大見出しに関する検証結果であった。

3-7-1-2. 大見出し以外の見出し

次に見出しを見ていきたいのだが、各見出しともに上記した通り扱っているスポーツ種は21種と変わらず、見出し量も大見出しのものと大して変化を見ることができなかった。総じて2000年と比べると見出しの数が減少した。発刊日数が少ない事もあるが、これは写真の1枚1枚が大きくなった事が要因にあげられる。文字よりも写真で読者をひきつけるという新聞社側の考えも見て取ることができた。

女性の記事に関しては、総数が460個で、大見出しでは31個扱われた。内訳としては、芸能10個、フィギュアスケート9個、ゴルフ5個、カーリング2個、モーグル2個、テニス、柔道、スピードスケートが各1個であった。

芸能では、沢尻エリカが4回登場し総数は54個であった。高城剛氏との離婚騒動で4日連続一面を飾った（「沢尻エリカ離婚へ」 4/26 など 4/29 まで）。他は広末涼子の熱愛騒動と結婚で2個（「広末再婚」 10/10）、高島彩、木村カエラ、上戸彩、酒井法子の（各1回）と見られた。

女性アスリート（個人）では、浅田真央が9個（145個）、宮里藍が4個（59個）、上村愛子が2個、宮里美香、本橋麻里、クルム伊達公子、高木美帆、谷亮子が各1個であった。団体ではカーリング日本代表が扱われた。

芸能も含めて、ほとんどの記事で愛称、もしくは下の名前が見出しで使われていた。カーリングでは、バンクーバー五輪での試合結果について報じられていたのだが、「カー娘」というチーム全体のみならず、選手の一人である本橋麻里の愛称「マリリン」も見出しで登場。浅田真央も全9個「真央」と表記された。女性アスリートで愛称、下の名前が用いられなかったのは、クルム伊達公子だけであった（「伊達 40歳ショット」 9/29）。

以上が2010年の日刊スポーツに関する結果である。

3-7-2. 東京スポーツ

続いて東京スポーツについてみていきたい。この年は20枚130円（金、土日は28枚で130円）で、298日間発刊されていた。

見出しの総数は5773個で、一日に約19.3個見出しが載せられており、2000年と比較すると約5個増加した。大見出しは298個、中見出しは596個、小見出しは3262個、写真は630枚、図表は343個であった。また、扱っているスポーツ種は大・中・小見出し・写真の順に14、17、28、15種目と、見出しの総数はかなり増加し、小見出しではかなりのスポーツ種が扱われていた。

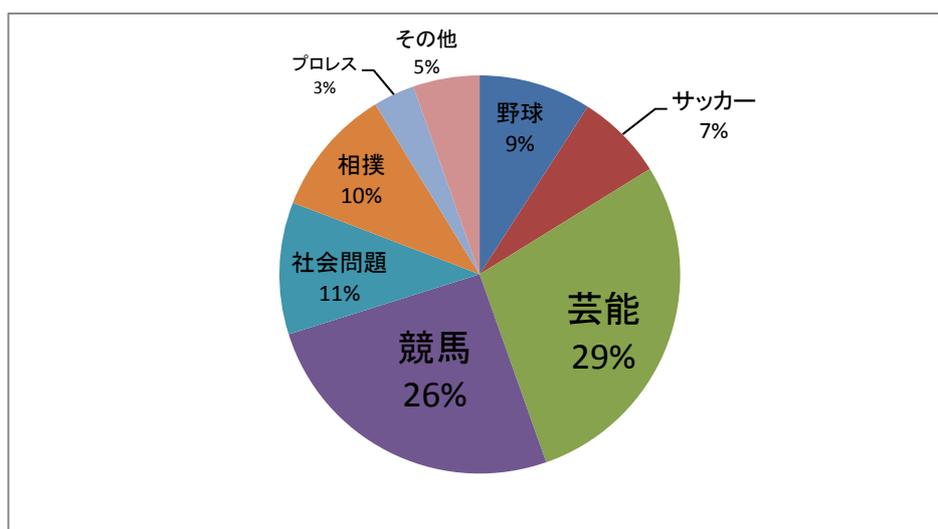
3-7-2-1. 大見出し

大見出しはこの年も、1日に1個の割合で見ることができた。扱ったスポーツ種は14種類であり、詳しくは表18、図13を見てほしい。見出しの表記としては、固有名詞のみの物もあれば、文のようにになっているものもあり、バラバラであった。

表18. 2010年の東京スポーツの大見出しにおけるスポーツ種と個数

個数	スポーツ種	個数	スポーツ種
85	芸能	5	ゴルフ
76	競馬	4	ボクシング
32	社会問題	2	スピードスケート
31	サッカー		スノーボード
	相撲	1	フィギュアスケート
27	野球		五輪
10	プロレス		PRIDE

図13. 2010年の東京スポーツにおける大見出しスポーツ種別割合



2000年とはかなり割合が変化した。野球、プロレスに関する見出しがかなり減少し、芸能、競馬が2倍以上増加した。

芸能記事では、押尾学の覚せい剤所持兼死体遺棄事件の公判関連の見出し（「押尾被告切られた」 9/9 など）、沢尻エリカと夫・高城剛の動向を伺う見出し（「沢尻復縁旅行」 10/21 など）、そして年末に発生した市川海老蔵暴行事件に関連する見出し（「海老蔵犯人特定」 11/30 など）、この3つがほとんどを占めた。押尾学に関しては、元妻の矢田亜希子に関連する記事も登場した（1/28）。

競馬も2000年と比べて2倍以上増加した。G1の行われる毎週金、土曜日には必ず一面で、2人の競馬記者が予想を繰り広げていた。日本ダービー、天皇賞、有馬記念など特に有力馬が参戦する時には井崎脩五郎と田中裕二による対談も行われていた。表象の作用としては、馬の名前がほぼ使用されていた（「ペルーサ」「ブエナ」など 54個）。残りは騎手名、「穴」といった用語であった。

相撲は、朝青龍の暴行問題（「朝青1千万」 1/29 など 13個）、貴乃花親方の理事当選関連（「貴 vs 審判部」 11/16 など 8個）、そして角界だけではなく日本中を震撼させた野球賭博に関する見出し（「賭博」 7/6 など 9個）が飾られていた。

スノーボード、スピードスケート、フィギュアスケートは、バンクーバー五輪関連の見出しであった。スノーボードは、服装問題で話題となった国母和宏について2個（「国母対策委」 2/20）、スピードスケートは15歳で代表入りした高木美帆について（1/24）、フィギュアスケートは浅田真央ではなく、韓国のキム・ヨナに関するものであった（2/25）。

五輪に並ぶメジャーイベントとして、サッカーW杯が開催された。日本代表に関する記事はもちろんのこと（12個）、時差の影響もあってかブラジル代表やスペイン代表の試合速報をすることも見られた。

最後に激減した野球についてである。プロ野球（13個）、メジャーリーグ（12個）、大学野球、社会人野球が1個ずつであった。プロ野球においては、巨人に

関する見出しは 1 つも見られなかった。メジャーリーグは、松井秀喜についての見出しが 11 個であった。年初のエンゼルス移籍から、年末のアスレチックス移籍まで。そして私生活でも松井の妻について報道するなど、密着度の高さがうかがえた。初めて登場した社会人野球は、欽ちゃんこと萩本欽一が長年率いた茨城ゴールデンゴールズを退団し、球団を身売りにかけるといった話題であった (4/6)。

このように大見出しについて見てきたが、今までとは全く異なった内容で、特に巨人に関する見出しが 0 個だったのは驚きの結果となった。

3-7-2-2. 大見出し以外の見出し

次に中見出しである。総数は 596 個で扱った種類は大見出しから 3 つ加わった 17 種類であった。この 3 つは、カーリング (2 個)、ノルディック複合、卓球 (1 個) であった。

カーリングはとノルディック複合は共にバンクーバー五輪での結果を伝える見出しであった。カーリングは 2 つ共に「カー娘」と表記され、「カー娘大敗」(2/24) などと扱われた。卓球は、福原愛選手が早稲田大学を退学するという事を知らせるものであった (「愛退学」 3/6)。

中見出しのスポーツ種別の主な数は、競馬 (204 個)、芸能 (143 個)、社会問題 (62 個)、野球 (51 個)、相撲、サッカー (38 個)、と続いた。競馬に関しては、毎週木曜日に「〇〇確定」という中見出しが掲載された事が増えた要因だと考えられる。野球に関するものが増えたのは、2 面、3 面とほぼ毎日野球について報道されており、その宣伝を含めて中見出しで書かれる事が多かった。

次に小見出しについてみたいと思う。小見出しは 3262 個で扱われた種類は 28 種類だった。中見出しから加わったものとして、UMA (8 個)、総合格闘技

(7個)、柔道(6個)、レスリング、K-1(4個)、モーグル(3個)、バドミントン、競輪、競艇、テニス、バレーボール、水泳が各1個ずつであった。

まずUMAについてである。1990年には人面魚で一面を飾ったが2000年は登場する事はなかった。しかしこの年、宇宙人、ヒューマンアンドロイド、そしてUFOとUMA関連の見出しを8個見る事ができた。傾向としては、裏一面で詳しく扱うケースがほとんどであった(「UFO大編隊 神宮に出現」8/31)。

総合格闘技は、石井慧に関するものが全てであった(「石井結婚」)。

柔道は、世界選手権での結果がほとんどであった。しかし例外として、福見友子に関するものが見られた(「柔道女王・福見、石井斬り」1/7)。

レスリング、モーグル、バドミントン、テニスは女性アスリートに関するものであった。レスリングはアジア大会における結果であったが、吉田沙保里(2個)、浜口京子、坂本日登美の金、銅メダル獲得を伝えるものであった。

モーグルは、上村愛子はバンクーバー五輪に参加はしたが、競技結果に関してでは無かった(「上村愛子はソチを目指せ」2/17)。

そしてバドミントンは、潮田玲子に関してであったが、「潮田スケスケ計画」(8/26)という、男性視線を意識したような見出しであった。

他の小見出しの数割合は、競馬(854個)、芸能(853個)、野球(312個)、相撲(288個)、サッカー(229個)、プロレス(169個)であった。野球、サッカーの見出し数の増加が目を見張る。野球は相変わらず巨人に関するものは少なかつたが(16個)、メジャーリーグに関連するものが125個と多さを見せた。サッカーは日本代表に関するものが128個と半分以上を飾った。

写真に関しては、630枚でスポーツ種は15種類であった。大見出しからはカーリングが増加した。

数割合は、芸能が201枚、競馬122枚、野球59枚、サッカー41枚、プロレ

ス 29 枚となった。写真に関しては例年の傾向通り、大見出しと数が比例していた。

図表は 343 枚で、この年も競馬が多く見られたが 298 枚とかなりの多さを見せた。図表自体が多くなった。競馬は、見出し数自体が多くなった事もあげられるが、記者の予想結果、馬の過去レース結果等がかなり増加した事が要因といえる。

最後に女性に関して述べたい。女性記事は 644 個登場し、大見出しでは 40 個見ることができた。そのうち 525 個は芸能関係で、大見出しは 34 個であった。

中でも沢尻エリカに関する見出しが日刊スポーツ同様に多く見られた。9 回登場して 53 個を誇った。

女子アスリートでは、小見出しでたくさん見られた。上述した以外では、バンクーバー五輪の特集として「バンクーバー五輪美女ランク」が (1/14)、またアレクシス・トンプソンという選手についてもとりあげていた(「エビアン 2 位、驚異の 15 歳少女」)。

以上が 2010 年の東京スポーツについての調査結果である。

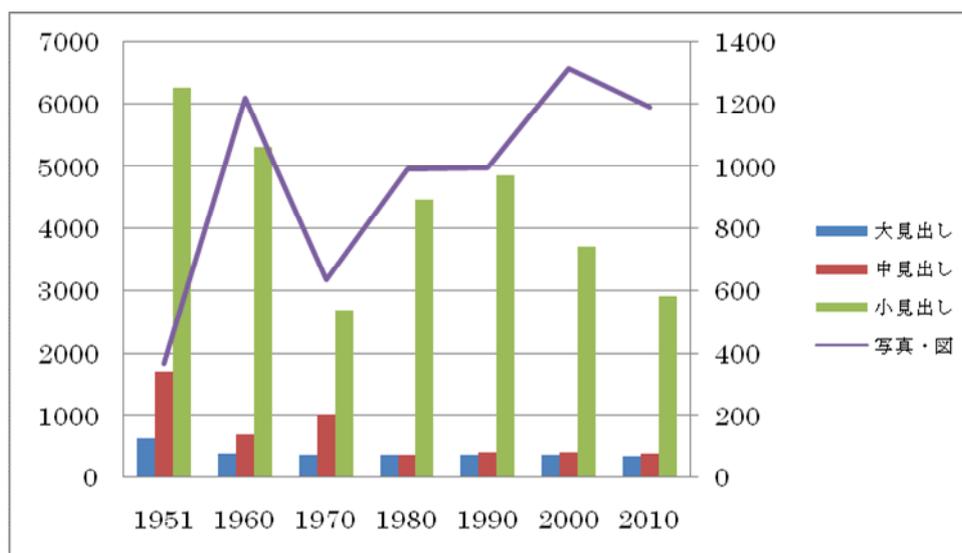
第4章 まとめ

ここでは、今まで分析してきた結果を4つの視点から分析していきたい。

4-1. 見出しの総数

見出しの数についてだが、以下のような結果となった。左軸は大・中・小見出しの個数で、右軸は写真・図表の個数である。日刊スポーツでは、1970年を除いて創刊当時から見出しの総数が減少している事がわかる。これは、結果だけを伝える事から、起きた事象を詳しく述べるようになった事が要因だと考えられる。また、文字による見出し（大見出し・中見出し・小見出し）数が減少し、写真・図表など目で見てすぐに内容がわかるような見出しの構成に変化しつつあることがわかる。

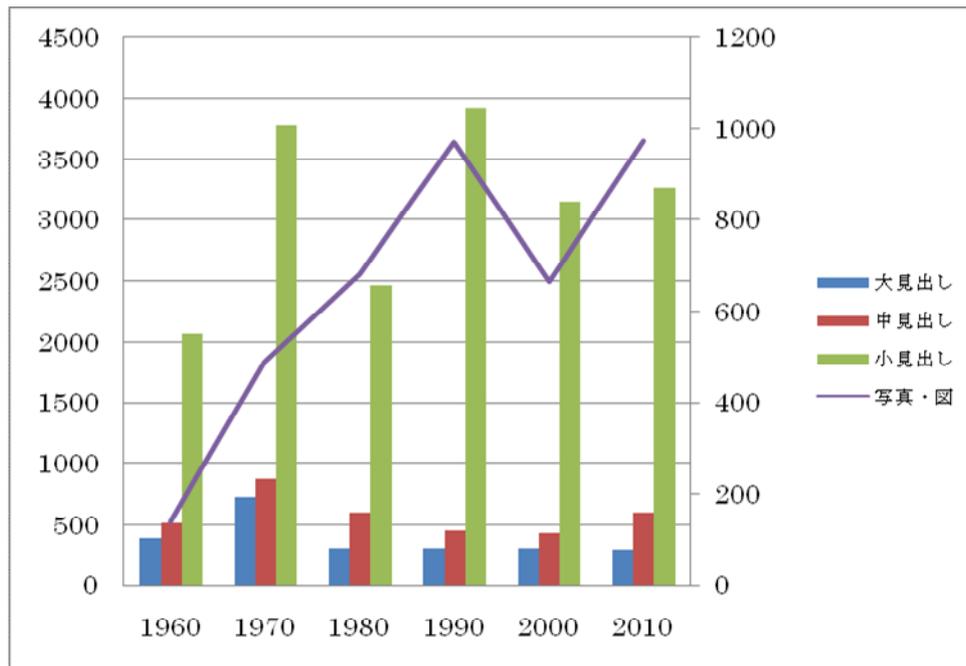
図 14. 日刊スポーツにおける見出しの総数比較



一方の東京スポーツであるが、こちらは日刊スポーツとは逆に創刊当初と比

較すると見出しの数は増えている。また、2000年こそ写真の割合が少なかったが、年々増加している事も見て取ることができた。

図 15. 東京スポーツにおける見出しの総数比較

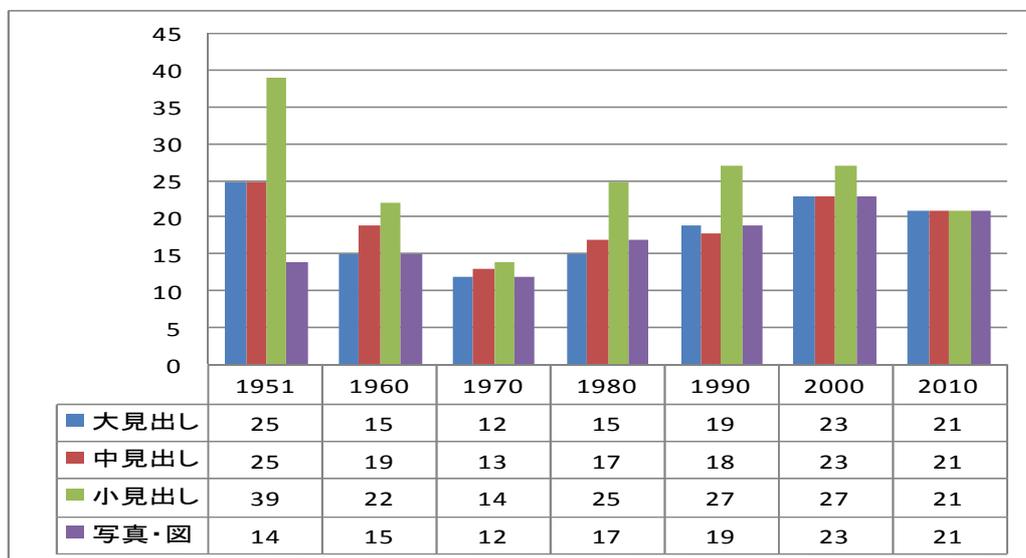


4-2. 見出し別スポーツ種比較

続いてスポーツ種別に見ていきたい。

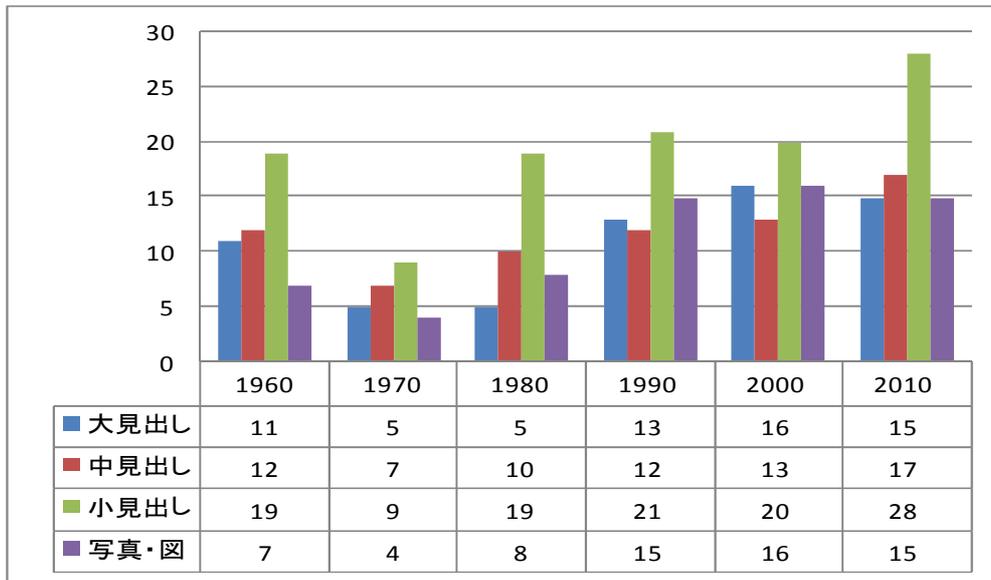
日刊スポーツは、1951年に圧倒的な多さのスポーツを見出しで扱っていた(図 16 参照)。しかし、その大半は結果のみを伝えるものであった。しかし、大見出しに関しては現在と変わらぬ数のスポーツを扱っていた。また1960、70年と扱うスポーツ種は減少したものの、それ以降2010年まではコンスタントに扱うスポーツ種が増加していた。これは、三浦が言っていた「スポーツ専門紙」から「総合娯楽紙」への変身という意味がうなずける結果となった。

図 16. 日刊スポーツにおける、見出し別スポーツ種別比較



一方東京スポーツは、1990年以降に多くのスポーツを扱うようになった（図17参照）。これは、1面だけでなく、それ以後の面に書いてある記事の紹介をするだけの見出しが多くなった事が要因であろう。この傾向は今後も続くと思われる。

図 17. 東京スポーツにおける、見出し別スポーツ種別比較



4-3. スポーツ種別総数割合

スポーツ種別総数割合であるが、日刊スポーツは野球に関する見出しが 56% を占めた (図 18 参照)。上記したように、扱うスポーツは増加し「総合娯楽紙」の様相を見せてはいるものの、野球に関する記事が 56% を占めるなどまだまだ「野球専門紙」といってもおかしくない状況である。近藤の研究結果と変化を見る事ができない。しかし、2010 年度は野球の割合が減少したので、今後はどんどん他のスポーツが増えていく可能性もあるだろう。

一方の東京スポーツは、野球とプロレスが半数以上を占め、競馬や芸能が続く形となっている (図 19 参照)。しかしこちらに関しても、2010 年の様子と比較すると真逆の結果が見られており、今後は芸能や社会問題に関する話題が増えていくものと予想される。

図 18. 日刊スポーツにおける、スポーツ種別総数割合

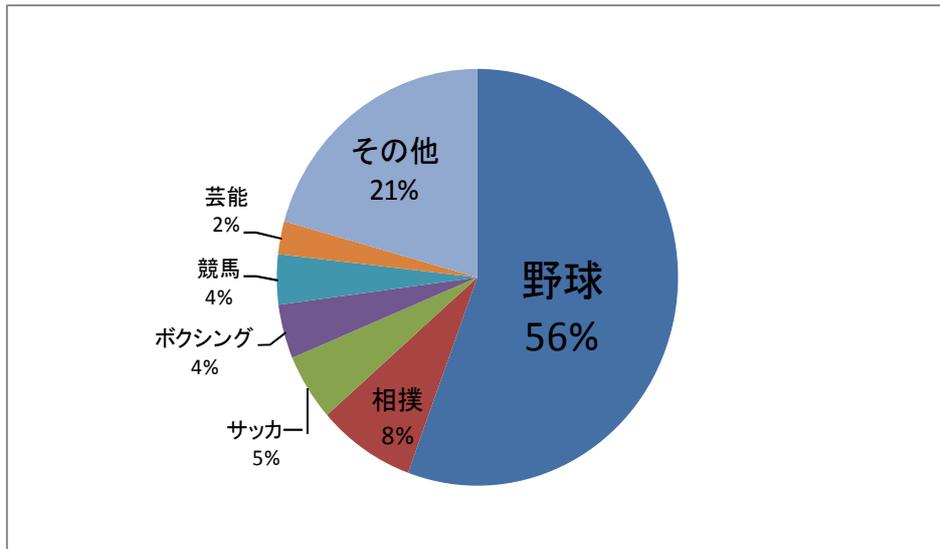
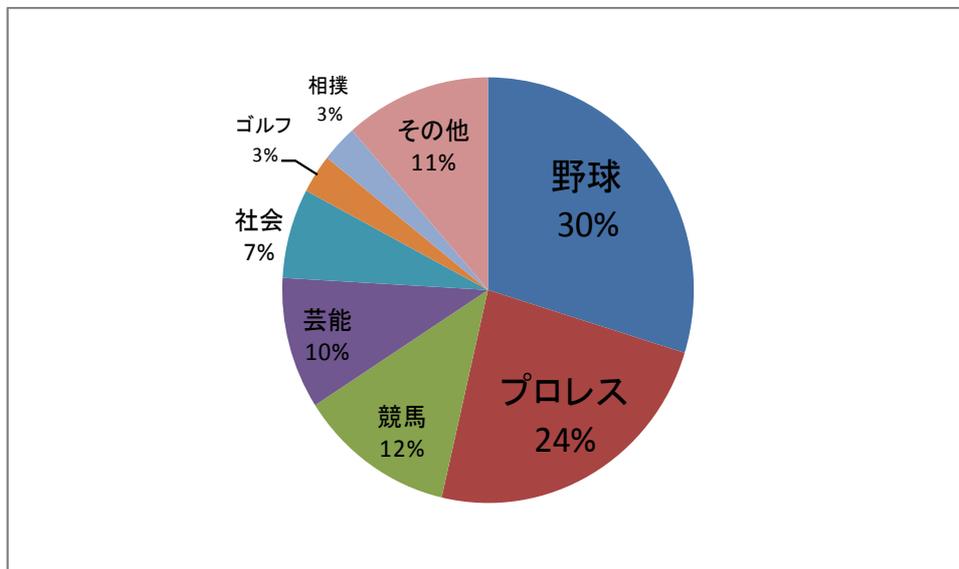


図 19. 東京スポーツにおける、スポーツ種別総数割合



このように結果だけ見ると、日刊スポーツと東京スポーツの 2 紙は扱っているスポーツ種は変化がない事がわかった。田所が述べたほど大きな変化は、この点に関しては見られなかった。

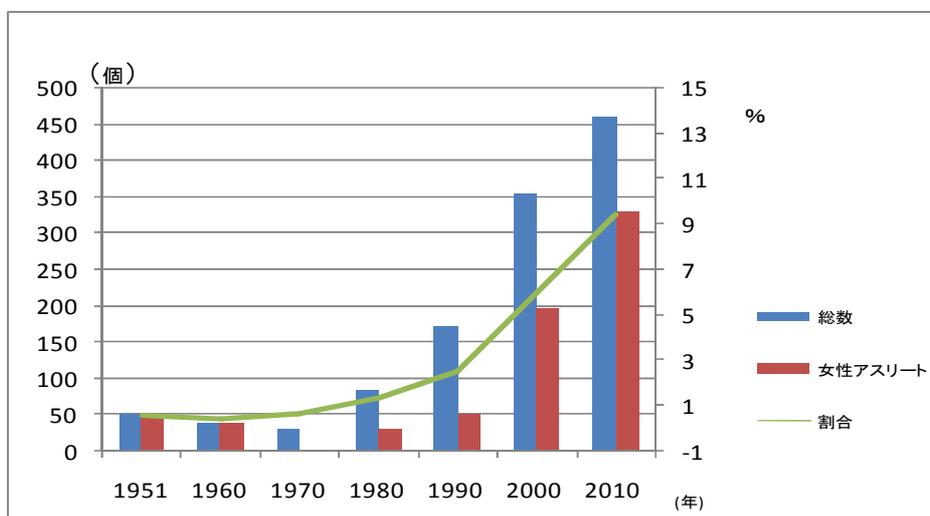
4-4. 女性に関する見出し

最後に女性に関する見出しについて述べたい。

まずは図 20、図 21 の説明からしたい。「総数」とは女性に関する見出しの総数であり、「女性アスリート」は女性アスリートのみを扱った見出しをさす。そして「割合」は全見出しから見た女性アスリートを扱った見出しの割合をさしている。

まず日刊スポーツに関しては年々数が増えている事がわかった。特に 2000 年は、シドニー五輪で女性アスリートが活躍した事もあって 2 倍以上増加した。しかし、全体の中で見ると 2000 年で 7%、2010 年では 9%とかなり少ない割合となっている。

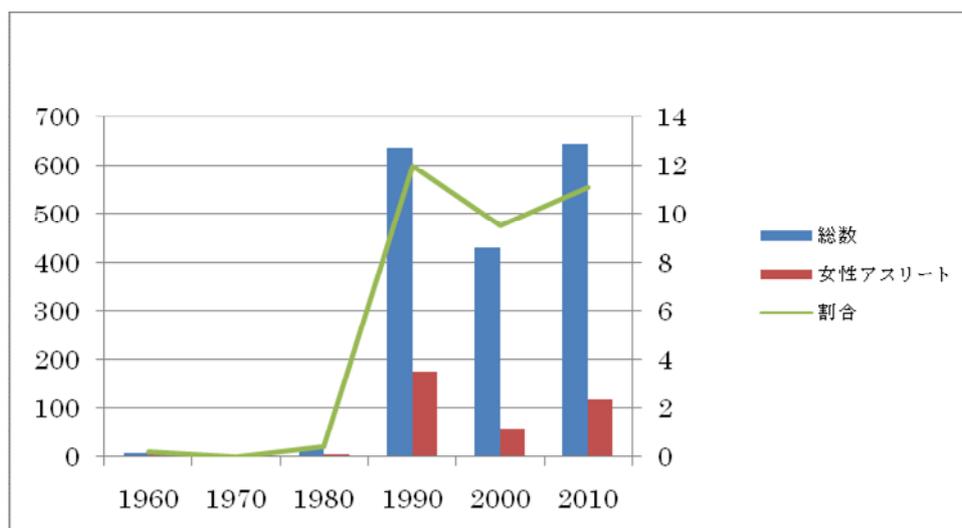
図 20. 日刊スポーツにおける、女性に関する見出し数



東京スポーツに関しては、1980 年までは野球・プロレスといったいわゆる男性的なスポーツが中心に報道されていた影響もあり、女性を扱う見出しは皆無に等しかった。それ以後、芸能・社会問題を扱う記事が紙面を賑わすようにな

ると、女性記事は少しずつ増加したが、女性アスリートを扱う見出しはまだまだ少ないのが現状であった。

図 21. 東京スポーツにおける、女性に関する見出し数



女性に関する記事に関しては熊安が述べた「男性にかかわる記事の割合が増加している」[熊安、2000：162]という事は確認できず、2紙ともに女性記事の割合が近年増加傾向を示した。しかし、全体の割合で見ると2紙ともに10%に届いていない状態で、女性アスリートに限定するとさらに少ない結果となった。

4-5. おわりに

以上、日刊スポーツと東京スポーツという2紙を資料として、戦後の日本におけるスポーツの概観の変遷を辿ってきた。しかし本研究で述べた事が全てではない。まず、(1) 朝刊紙と夕刊紙のそれぞれを代表する1紙しか調査対象にしていない点、(2) 大見出しに重点を置いてのみ調査した点、(3) スポーツ種に絞って調査した点、という3点が挙げられる。

(1) に関しては、研究背景でも述べたが朝刊紙、夕刊紙共にその他2紙が

存在している。これらを全て調査しないと朝刊紙と夕刊紙における変遷の比較は完全ではないといえよう。

(2) に関しては、大見出しについては詳しく分析結果を報告したが、その他の見出しにおいては扱ったスポーツ種の変化、そして個数の割合を載せたに過ぎなかった。全ての見出しを同じように分析することで完全といえよう。

最後に(3)に関しては、見出しで扱ったスポーツ種に重きを置いて調査を進め、内容に関しては薄いものとなってしまった。この結果、田所が述べた夕刊紙の特徴「内幕、ゴシップとみられるものが多くなり、プライバシーの問題もときにならないではない。(略)読み物が柔らかすぎる」[田所、1964:47]という点を証明することができなかった。

今後はこの3点に関して研究を進めて、日本におけるスポーツの概観の変遷を完全に辿っていきたい。そして、今後この特異なメディアであるスポーツ新聞に関する研究が進められていく中で、本研究が助けになることを願う。

<引用、参考文献>

Birrell, S & Loy, J. W、1979、「Media Sport: hot and cool」（糸野豊編訳、1988、『スポーツと文化・社会』、ベースボール・マガジン社）

後藤修、1970、「スポーツ紙よ情報病に罹ってないか―全スポーツ紙編集長のインタビューを通して」、『潮』127、潮出版社、312-324

石井秀一、2006、「時代の上澄みをすくい上げる ― “固有名詞” を中心にすえた紙面づくり―」、『新聞研究』661、日本新聞協会、67-70

加藤秀俊、小和田次郎、1969、「言論の論理と現代の新聞 ―全国紙・地方紙・スポーツ紙の状況」、『月刊労働問題』136、日本評論社、65-75

木村象雷、1950、「スポーツ新聞のあり方」、『新聞研究』11、日本新聞協会、25

北田明子、1997、「スポーツと言語表現―スポーツ紙における言語的表現―」

大阪樟蔭女子大学編『文化研究』11、1-9

近藤衛、1960、「スポーツ新聞及び週刊誌のスポーツ記事の内容分析と読者の反応分析」

- 福岡学芸大学編『福岡学芸大学紀要』10（第4部）、129-139
- 熊安貴美江、2000、「新聞のスポーツ関連記事見出しとジェンダー：「月刊切り抜き体育・スポーツ」(1990年～1999年)より」 大阪女子大学編『人間関係論集』17、145-163
- 前泊博盛、2009、「NIE と大学教育：新聞を百倍楽しむ方法」 沖縄大学編『沖縄大学法経学部紀要』12、57-59
- 三浦基裕、2009、「スポーツ紙の変遷と苦闘の時代」、『ジャーナリズム』230、朝日新聞社
ジャーナリスト学校、4-11
- 中房敏朗、2010、「蘊蓄 欧米におけるスポーツ新聞(雑誌)の過去・現在・未来」、
『現代スポーツ評論』22、創文企画、122-141
- 大木勝、1984、「総合レジャ-紙志向のスポーツ新聞に転期が来た」、『総合ジャーナリズム研究』21(3)、東京社、21-26
- 芹沢俊介、1992、『スポーツ新聞はなぜ面白いのか』、ジャプラン出版、p43
- 杉森一、石田敏夫、栗原程、1968、「これからのスポーツ新聞」、『新聞研究』205、日本新聞協会、28-32
- 志波吉勝、1988、「夕刊紙が売れる時 -読者が手を伸ばしたくなる紙面とは」、『新聞研究』439、日本新聞協会、31-34
- 清水勝人、1981、「日本の「夕刊」に未来はあるか(米・夕刊紙危機の"容体"から.....)」、『総合ジャーナリズム研究』18(4)、東京社、79-89
- 田所泉、1964、「スポーツ新聞の顔」、『新聞研究』156、日本新聞協会、46-49
- 滝口隆司、本間浩輔、清水諭、友添秀則、2010、「メディア変容とスポーツの今後」、『現代スポーツ評論』22、創文企画、16-31
- 山本雅生、1982、「ナウな感覚で夕刊紙面を刷新」、『新聞研究』371、日本新聞協会、53-55